僕と彼女のアリア

下名
真魚

「それでは、リレー出場希望の人。挙手してくださーい。」
ほう。
去年のクラスと違って、今年はみんな積極的だな。

ウチのクラス、運動部所属が多いからだろうな。
クラス担任の趣味か？たまたまなのか？
このクラスわけっつーのの基準て、どうなってるんだろう。
そのせいで、ウチの家庭内に暴風雨が吹き荒れましたさ。
もう勘弁してほしいよ。

「　　・・・１、２、３。」
それじゃ、僕を追加してっと。
「・・・４人。決まりですね。」

“おおーー。”
“４人揃った”
いや、ポーカーじゃないんだし。

「ちょっと！どうして中森くんが手上げてるの！１５００はどうするの！」
こえーーよ、紀野っち。振り向きざまにその顔はないだろう。

「いや、今年はリレーで行こうかと思って。」
「どうして！　ありえないよ！！」

そんな怖い顔でびっくりマークいっぱいつけて噛み付かなくても
いいだろう。
いいたいことは分かるけどさあ・・。

“どうしてー、いいじゃん、リレーで。紀野ちゃんと中森が出たら
クラス優勝確実だしー。”
“そうだよなー。”

「でも！中森は・・・。」
ついに呼び捨て。

「じゃあ、１５００の出場希望者いますか。」
さすがあ、司会進行。
「おれ！」
砂原か。

「ラグビー部キャプテンとして、今年の有鄰Ｎｏ１を目指す。
　陸上部ばっかりいいかっこさせねー。」
まあ、無理だけどな。津田は早いぞ。

「中森っ！」
「中森が長距離早いのは知ってっけど、別にいいじゃん。
　砂原だって走りたいって言ってんだし。」
「紀野さん、よくないと思うよそういうの。
　イベントなんだからさ、みんなで楽しまないと。」

浅尾さん、援護射撃ありがとう。
でも、あとで３倍になって返ってきそうな気がします。

「中森にはバトン渡さない・・・。」
　うわー、目線あわさないで捨て台詞だよ。僕って極悪人かぁ？

いいたいことは分かるんだけどね。でもね、僕にも考えというものがあるのだよ。
世の中って言うのはいろんな人の思惑で成り立ってるものなのさ。

けど、このホームルームの後の部活。行きたくないなぁ。
　事情を話せば分かってくれるとは思うんだけど、全身に
中森とは口聞きたくねーオーラが発散されているのは、
超能力者じゃない僕にも分かる。

「じゃあ、出場者は以上の通りということで。」
　うーん、緑色の黒板に白いチョークの文字が並んでる。いいな、これ。
なんか雰囲気盛り上がってくる。名前の一つ一つがさ、
やるぞーって言ってるみたいじゃない。

「エントリーはこれで出すんで、ちゃんと覚えといてください。」
“忘れるやつとかいるのか。”
「いるよー、時々。ほんとに名指しで引っ張りに行くまで忘れてるのとか。」

“大宮だろそれって、ぼーっとしてっから。”
“そこまで、ノビタじゃないよ。”
あーでも、ノビタっぽいかも。ハハ・・・・・はぁーあ。

「じゃあ、終わりまーす。」
やれやれ、だな。

”さあってと、帰るかー。”
いいなあ、僕も、部活サボってかえりてぇよ。

”ゆきー、先行っといてー。”
言わなくても、紀野っちは先に行ってんだろうなあ。
このズズッていう椅子と床の擦れる音が、なんか未練ていう感情の
擬音のように聞こえる。

「ねぇ中森くん。紀野さん、どうしてこだわるわけ。」
「・・・、さっきはありがと、浅尾さん。」
つか、もう疲労困憊。

「なんていうか、相性最悪みたいだね、二人の。」
「人当たり、かなりよくなったと思ってたんだけどなあ。」
つか、自信喪失。

「大丈夫だよ。確かに去年の頭ぐらいは、なんか近寄り難い
雰囲気あったけど、ちょっかい出してたのって相沢さんぐらいだったし。
でも、今はそんなの全然感じないよ。」
「浅尾さんにそういってもらえると、救われマス。」
つか、地獄に仏。

「これから部活？　走るの？　あのチッチャイ子と。」
あれでも大分成長したんだけどなあ。

「伸び盛りだからね。オレももうちょっとトレーニング方とか
勉強しないとダメだな。」
「へえー。大事にしてるんだ。」
「もう、本との妹みたいなもんだよ。」
「いいなあ、わたしもそんなふうに大事にされてみたーい。」
つーか、、、欲求不満？

「浅尾さんもいいオトコ捜せば。」
「同年代のいいオトコは、大抵パートナーが付いちゃってるのさ。」
「そんなもんかぁ？」

「そう、そんなもの。」
いいオトコか。どんななんだろうな、浅尾さんのいいオトコって。

　スレンダー系好みのやつなんかにモテそうだけどな。
教室で、こうやって前に横座りして話してるときもテンポがいいし楽しい。

去年はもっと内気な雰囲気っていうより、目立たない子って思ってたけど。
こういう明るく軽く合わせてくれる子って、オトコとしても話しやすい。
でも、スキになるオトコと、スキになってくれるオトコが合わないのかもな。

「じゃあ、行きづらい気持ちがてんこ盛りなんだけど、部活いってくるよ。」
「がんばってねー。」
まったくだ。

このドアのガタピシって音、青春の蹉跌の擬音みたい。

・・・一回死ぬか、オレ。

「アサオー、ゴミ半分もってー。」
「いーよー。」
んーー、と言うほど入ってないですけど。付き合いだから、まあいいか。

階段おりて一階の渡り廊下を歩いて、向かいの校舎のハジッコまで
持っていかないと行けないのが、めげそうになる。

でも、あそこって明らかに外なんだけど、みんな上履きでいっちゃうよね。
一応、コンクリート舗装されてはいるけど。
冬は死ぬんだよー。吹きっ晒しだから。

「アサオ、さっきがんばってたね。」
「紀野が絡むし、いつまでもホームルーム終わらないから。」
「ちーがーう、さっき中森くんの席の前に行って、話してたじゃない。
　なーに話してたんだ。」
んっ、ひっかけられた。

「なによー、そんなこというと思い出して恥ずかしくなるでしょ。」
田辺めー。そんなこと言うために、手伝わせたのか。

「考えられないよね、アサオがオトコと面と向かって話してるなんて。
　一年のときなんか、そばにも寄り付かなかったのに。」
「今もドキドキだよ。」
「そうだろうな、うれしそうな顔してるもん。
　私には見せてくれたことの無い笑顔だよ。」
「それ、なんか芝居入ってる。」

「でも、ほら。中森君て彼女いるんでしょ。橘花に。
　あとほら、あの千冬さまーとかいう妹とか。」
「プラス、部活の後輩。」
「スポ推のめっちゃ早い子。夏のなんとかで地区優勝したらしいね。
　ライバル多いよねぇ。アサオも大変だぁ。」

うーわ、すでに結構たまってる。学校中のゴミって、
集めるとこんなになるんだ。

「持ち上げるよ。イッセーの。」
何が出てくるかは見ない見ない。

「ライバルとかじゃないよ。私、カノジョになりたいとか思ってないもの。」
「戦う気、ゼロ？」
「ないない。そういう変な期待や嫉妬で苦しむより、
　ただのクラスメートでいた方が気が楽だもん。」
「そんなでいいのかぁ。」
おいおいおい。

「マンガとか小説だと、彼氏ゲット当前みたいに描かれてるけど、
　普通の友人のどこが悪いかなぁ。デートしてくれとか、そのさきとか、
　そういう願望無いもの。」
こらこら、ゴミ箱、階段でひきずるなって。ちゃんと持ち上げなさい。

「人それぞれだけどねー。まあ、アサオにしたら大進化か。」
水からあがった古代魚じゃないぞ、田辺。

あ、階段の上。
逆光でシルエットになってもわかっちゃう。

「浅尾さん、お久しぶり。」
なんだか、階段おりてくる姿がスターみたいだよ。

「うん。中森君もう部活に行っちゃったよ。」
「そっか。だけど、私最近ずっと茶道部に出てるから、
　練習見に行ってないの。でも、ありがとう。
そうだ、一度来てみない？　お茶ごちそうするよ。」

「えー、パスパス。私そういう堅っ苦しいの苦手だから。」
「そんなこと無いって。じゃあ、また気が向いたときにでも。」

　お茶がどうこうより、あなたと面と向かって対座すること自体で
圧倒されて、自信無くしそうだよ。

「うん。考えとく。・・・そうだ、さっき中森君と紀野さん、ちょっともめてたよ。」
「あら、また。なの？」

「うん、１５００に出るとか出ないとかで。」

ありがとう、じゃあね、か。
はああ・・・・。

「美人で社交的で、性格もいい。しかも成績優秀。」
ぐさっ、ぐさっ、ぐさっ、ぐさっ！

「赦してー。」
「ああいう妹と対抗できる彼女って、どういうんだろうね。」
とどめですかい。

「なあんだ、無茶くちゃ意識してるんじゃない。よかった、アサオが
普通の女の子で。」
何がいいもんかい。

「泣きたかったら、いつでも胸を貸したげるよ。」
「田辺一、もう二度とゴミ箱持ってやらないから。」
「あー、うそうそ。冗談でーす。」

ありがと。
聞いてくれて、ちょっとすっきりした。
割り切ってるつもりだけど、なかなかそうはなれない。
でもいつか、彼とは本当に、自然な気持ちで話せる友達になれたらいいな。

アップ中かあ。いつも早いな来るの。

ああやって、念入りに体を動かして、全部の関節を柔らかくして、
両足の筋肉を伸ばしている。
生真面目な彼らしい準備運動だ。

誰かさんはぱっときて、そのまま走り出して、
いつまでも際限なく走ってる。
いい加減なヤツ。
なのに、そういうヤツが速くて、一瞬で注目をさらっていく。
世の中って何か間違ってる。

今日は顔合わせずらいな。でも、私以外の誰が・・・。

「部長。」
「うぃーっす。」
そのうぃーっすっていうの、客観的に見て変だけど。

「あのさ、部長。今日体育祭のエントリーがあって・・・。」
「おう。」
「中森君、リレーに出るって。」
ああもう、空見上げちゃったじゃない。中森の馬鹿。

「まじかぁ・・・。」
「ごめんね、私がいたのに。」
せっかく体ほぐしてたのに、やる気なくすよね。

「いや、紀野のせいじゃないし。」
「津田君は？」
「１５００にエントリーした。去年から引きずってるもやもやに、
　ケリをつけるつもりだったから。
　あのとき、あいつ普通のスニーカーで走ってたんだよな。」
目に見えて落ち込んでる。

「俺の勝手な希望だったんだけど、かなわないとなると、

　それはそれできついな。」
「私、１５００出ろっていったんだけど、クラスの雰囲気が完全に
　リレー優勝の方に行ってて、私の言うことなんか誰も聞いてくれなくて。」
「まあ、仕方ないよ。でも、ありがとな、そんなことまでしてくれて。」
そんなに寂しそうに微笑まないで。

「今日は、もう帰ろうか。なんかやる気無くしたでしょ。」
「・・・・・。」

あの後ろ姿、センパイだよね。
どうして校舎の陰に隠れてるの？しかも体斜めにして覗き見してるし。
ほんと、時々分けわかんないことする人だ。

「せーんぱい、何やってるんですか。」
「ひぃっ。何もしてません、ただ立ってるだけです、
　って、なんだヒロか、驚かすなよ。」
「そんな驚き方されたら、こっちがびっくりしますよ。
　何かあったんですか。」
誰か、見られるとまずい人でもいるのかな。

「今日、体育祭のエントリーあったろ。」
「ハイ。　・・・ああ！あれですか。」

じゃあ、もうすでに結構バトルがあったんだ。
センパイ、女子に弱いからなぁ。っていうか、紀野センパイと、
とことん相性悪いもんねぇ。

紀野センパイ真面目だから、先輩みたいな斜めってる人って、
存在自体が、赦せないんだろうなあ。

「津田だけだったら、すまん、勘弁してくれ、で
　押し通すつもりだったんだけど。紀野っちがいるのがなあ。」
「はい。」
そうでしょうとも。

「出がけに浅尾さんに捕まったのが失敗だった。」
また、女子ですかい。

「センパイ、今年は女難の相が出てるんじゃないですか。」
あわわ、肩落としちゃった。しまった、言い過ぎた。
でも、面白いからやめられません、この手のツッコミ。

「何となくそんな気がしてきた。」
ほかに何があったんだろう。

「でも、夕暮れまでこんなところに立ってる訳にも。」
早く走りたいし。
「そうだな。行くか。」

うーん、いまいち緊迫感というのが無い人だなぁ。
あ、待ってくださいよ、私も行きますから。

「津田―、悪い、頼みがあるんだけど。」
これはひょっとして。
ああ、紀野センパイ露骨に顔背けた。部長もあんまりいい
顔はしてないな。

「津田を見込んで頼みたいんだ。」
これは、あの伝家の宝刀。
・・・うわ、もう手を合わせてる。
必殺、拝み倒しかあ！

「体育祭の１５００のことなんだけど。」
「中森出ないんだって。」
ちょっと怒ってるなぁ。そういう雰囲気が言葉の端に出てるよう。

でもさあ、中森センパイにはそういうの効きませんよー。
だって、中学の部活のときから、人の期待を裏切り続けてきたような人だもの。

優勝確実って言われた大会すっぽかすし。出たら出たで、わざと失格になるし。
ミズエオババの捨て身の“離縁”攻撃にも、
たんたんと運動場周回してたような人だもの。

部長のその、中途半端な抗議の姿勢じゃ、効果有り無し以前の問題として、
全く認識されませんから。

「俺の代わりに、こいつと勝負してやってくれ。」

「・・・も、もう一回言ってくれるか。」
う、紀野センパイ、その顔面、おもしろいです。

「ヒロが体育祭の１５００にエントリーした。勝負してやってくれ。」
「ちょっと、ヒロ、それ本当なの？」

「ハイ。もうホームルーム、パニクってましたけど。」
っていうか、阿鼻叫喚？

「たしかに、１５００ってオープン競技だから、
女子が走っちゃいけないってルールは無いんだけど。
まわり、ごついオトコばっかだよ。大丈夫か？」

「最初から飛ばしますから、集団には埋もれないようにします。
いざとなったら、キャーって叫びます。」

お二人ともかなりあきれてますね。っていうか、半信半疑？。

「中森、どういうことか説明してくれないか。」
を、術中に落ちた。さすがセンパイ。
童顔の割には、腹黒いんですよねー。

「ヒロは、一年なのにこの前の記録会で優勝しただろ。
もう、この地区にはレースで競い合えるような女子はいないんだよ。」

へへーん。
だってもし負けたら、センパイの、想像するにおぞましい地獄の特訓が
待ってるんだもん。

「だから俺ってわけ？１５００で俺と競って、勝てると思ってるの？」
「少なくとも、一年のときの津田よりは速いと思うぜ。」
あ、怒った。

「中森はなんで走らないんだ。」
「それだと、練習のときとかわらないだろ。練習と競技って違うじゃない。
練習でどんだけ速くても、競技でその力を出せなかったら意味ない。
レーサーはな。」

「中森がどんだけ鍛えたか知らないけど、俺だって去年からは
タイムあがってるんだぞ。中森はもう俺とは勝負するまでもないと、」
「わかった。オマエとの決着をつける機会は必ず作る。
だから、今回はヒロと走ってくれ。頼むよ。この通り。」

センパイが頭下げた。あの、オレ様至上主義のセンパイが。

「部長。お願いします。」

と私もいいつつ。

にしても、低姿勢で、驚かせて、煽って、もう一回低姿勢。
センパイって、根っからの悪党だよきっと。

「中森から、“オマエとの決着はつける”なんていう台詞を
聞くとは思って無かったよ。」
折れましたね、津田部長。

「あのさあ、その臭い青春ごっこ、早く終わってくれないかなぁ。」
はい？

「私さっきからずっと出番待ってるんだけど、出づらくて出づらくて。」
「相沢さん。」
誰だっけこの人。紀野っち先輩とやや親しげだけど。

「浅尾さんに聞いたけど、紀野もさあ、いいかげんにしないと
クラスに居づらくなるよ。」
「ほっといて。」

「相沢、どうしたんだ？その格好。」
「中森、それ真剣に言ってる？　まったく・・・。」
どうも話が見えませんなぁ。

「津田部長。今日から合流するんで、よろしくお願いします。」
「ああ、こっちこそ。相沢さんが入ってくれるんなら、
　今年は去年以上の成果が期待できるよ。」
「まあ、それもこれも中森のおかげっていうか、
　中森のせいっていうか、だからちょっと聞いてやってくれない。」

「一年女子が出場するってことだけでも、
　ちょっとしたセンセーションだから。
　それがうちの部員ってことになれば、
　オレも傍観する訳には行かないし・・・。」
だからこの人誰なんですか？

「オレとレースしてみるか、ヒロ。」
「ハイ！ありがとうございます。」

ふー、一時はどうなるかと思った。センパイ、やることが無茶です。
でも、男子と対等に競うのって、すっごくワクワクします。

身長高いな、この人。
わ、頭なでなでしないでください。子供みたいじゃないですか。

「この子がヒロちゃんか。ふーん。」
「あのう、ワタシさっきからどういう話になってるのか、
　全然わかんないんですけど。」
ぷんぷん。

「ヒーロちゃん、お姉さんと一緒に駅伝走ろうね。」
はい？

「そっか、それで来たのか。」
「なーかーもーりー。そういうこと忘れないでくれるかな。
　あんたが、女の子の世話ばっかして忙しいのはわかるけど・・・。」
「オイ。」
いや、それはあたってますよセンパイ。

「ダチのわたしとの約束まで、忘れないでくれるかな。」
「忘れてねーって。むしろ大歓迎。」
「一走がオレ、二走相沢さん、四走がヒロ、アンカーが中森。」
「なかなかいいチームじゃないか？」

そういうことですか。

「あと、三走の男がいればな。」
「第３の男か・・・。」
ごきっ！

いま、マジでセンパイの頭殴った。相沢さんてひょっとして最強の人！

あっつー。

学校でこんなに汗かいたの久しぶりだな。
Tシャツびしょびしょだよ。

「大丈夫か足。」
「うーん、大丈夫。一応ずっと自主トレ続けてたから。
　どっちかって言うと気持ちいいって感じ。」
「だろうと思った。昨日今日に始めた走りじゃない。
　でも、フォームがちょっとな。あれじゃ疲れるぞ。」

二年になってクラスが分かれてから、話すの久しぶりだな。

「左右に重心がぶれてる。バレー部の練習前のランニングって感じだな。
　その走り方だったら足に負担がかかるぞ。」
「じゃあ、今度チェックしてよ。」

中森の話し方だな。
余計なことあんまり言わないで、要点をぽんぽん投げつけてくる。

「一人で走ってると、こんなスピードでいいのかとか、
　力の配分どうすればいいのかとか、迷ってきちゃってさ。」
「それだけ、走りそのものに自信が出てきたってことじゃないのか。
　・・・っていうより、周りに心配かけたくないから、
　そうなるまで一人でがんばってきたんだろ。」

ああもう、やなやつ。
そんなとこまで見透かさなくていいのに。
・・・Tシャツ透けてないだろうな。

「くくっ。オレって千冬のもっとすごい格好みてるから、
　そういうの気にしなくても大丈夫だぞ。」
「誰のすごい格好ですって。」
「いやっ、冗談！本の軽いジョーク。いやー、久々に相沢さんと
　ご一緒して、つい・・。」

「なにが“つい”、よ。そんな格好してませんからね、誤解しないでね相ちゃん。」

相変わらず、クラスはなれても引っ付いてるんだなこの兄妹。

「走るんだね。とうとう。」
「うん。ようやくここまで来た。」
最初は怖かったな、やっぱり。
「無理はだめだよ。」
「わかってる。」
いや、全然わかってないんだろうな、きっと。
「何かあったら、うちの宿六に。」
「心配性だね、妹は。でも、ありがとう。」

あれから一年近く立つんだな。わたしの生涯で一番こっぱずかしい日。
千冬ちゃんの胸で泣いちゃった日。
　ただ、その日暮らしを続けるんじゃなくて、もう一度
何かの目標に向かって前に進もうと思った日。
私たちの一年って、ほんと、ようやくって感じだよ。

「で、何用で来たの。」
「えーと。そうそう、景に先に帰るって言いにきたんだ。
　コイちゃんたちが、寄り道して帰ろうって言うから。」
「携帯持ってなかったっけ。」
「そうなんだけどね。
　わたしたち二人だけの家族で、それが少しの距離を、
　携帯に頼りだしたら終わりなんだと思う。面倒だなって思っても、
　ちゃんと足を運ぼうって。
　だって、わたしと景って、生まれてから当たり前にそばに居た家族じゃないから。」

あんた達って、ほんとに気楽に生きられないように出来てるんだな。
だから、私みたいなのが好きになるんだろうね。

このごろ、窓を開けていると、流れ込む夜の空気が随分涼しくなった。
季節が夏から秋に移って行くというのを、十分意識できるぐらいに、だ。

“でね、みんな夏ばてみたいな感じで、元気でないんだよね。
　昼間の教室は、まだまだ普通に暑いから。”

　とはいうものの、昼間の太陽に焼かれたマンションの壁は、
未だ十分に暖かい。
　特に最低なのは、学校から帰って、ドアを開けて、
エアコンをつけて、それが効果を発揮するまでの時間。

　暑さに弱い千冬は、駅から家まででも暑かったのに、
もううんざりって顔してる。でもね、誰もいない部屋をエアコンで
冷やすって言うのには、どうも抵抗あるんだよ。
電気代も馬鹿にならないし。

「エアコン、ついてないの？」
“音楽室には有るんだけど、パート練習とかいろいろわかれてやるから。
　屋上の声だしなんて最低だよ。”
「そこまでやる必要あるの？」
“まあねー。誰が始めたんだろうね、そういう練習。”

ベッドに座って、壁にもたれて、携帯を耳に押し当てて。
こういう夜、もう何度過ごしたんだろう。

“運動部は、汗かくのが仕事みたいなものだろうけど、
　合唱には邪魔なだけだから。
　流れる汗と一緒に、やる気がどんどん抜けていくような気がする。”

「汗まみれの合唱って、なんだかあまり美しそうじゃないな。」
“うん。全然いけてない。”
「でも歌うんだ。」
“みんな好きだからね。歌うの。”

うん。去年感動したよ。・・・・いやなことも、ついでに思い出したけど。

「話し変わるんだけどさ。」
“何？”
下らないことなんだけどね。

「道歩いてるときに、猫が横切ったりするだろ。」
“黒猫？”
「じゃなくて、普通の猫。」

“で？”
「ああいう猫って、道を渡りきったところで必ずこっちをじっと見てるよね。」
“あるー！”
「あれ、なんでなんだろう？」
“くっくっく。猫もなんとなく寂しいんじゃない？”
「実は僕もそうかなーって思ってた。」

“同じだね、景くんと。”
「ぇえー？」
“子供のときの景くんてそんな感じだったなぁ。
　仲間に入らないし、入りたいって感じでもないんだけど。
　でも、ふっとみると、こっち向いてる。
　なんか、放っておけなかった。“

「そうかなぁ。」
“偉いでしょ。それに気づいた私って。”

「・・・そうだな。」

携帯だと、素直に話せる。
昔からそうだった。
　面と向かってだといいにくいことが、あのマンションの明かりを
見ながらだと話せてしまう。
彼もそうだった。

「景くん、進路調査とか有った？」
“いやー、まだだけど。あったの？”
どうしよう。話してしまおうかな、あのこと。
「ちょっと、相談したいことがあるんだけど。」

“けいー、お風呂空いたよー・・・あ、ごめん電話中だったんだ。”
千冬の声だ。
“とにかくお風呂空いてるから。ごめんね邪魔して。”

“相談て何？”
なんか、話す気がなえた。

「やっぱ、別の機会にする。今夜はいい。」
“なんだよ、気になるじゃないか。
　瑞江って、そのまま上の大学に上がるって言ってたよなあ。
　そうじゃないのか？”
「だから今夜はいいって。別に急ぐ話じゃないし。」
“それならいいけど。”

・・・って、どうしてそこで引くかなー！
このオトコは。ほんと淡白なんだからっ！

夜の闇の中で、虫が鳴いてる。
何かが鳴くと、それに応えるように何かが鳴き始める。
なんだか、わたし達みたいだ。

ついこの間まで、隣の部屋には帰省してきたお姉ちゃんがいた。
たった４ヶ月離れていただけなのに、なんだかとっても違って見えた。
前から大人っぽかったけど、それが加速したような気がした。

向うで一体どんな生活をして、どんな経験をしたのか、
（オトコ出来たのか？）
聞いてみたけど、ありきたりの学生生活の話しかしてくれなかった。

　でも、きっと、あの人のことだから、
心に残るような何かを経験したんだろうなって思う。

“ミチルさんのこと、考えてるのか？”
「ど、どうして？」

“この前、ミチルさんがまた向うに行ってから、
　なんとなく寂しそうだったからな。”
　景クンも、見るとこ見てるんだね。

「人と別れることに、まだあんまり慣れてないからかな。」
“僕を振った割には、そういうこというんだ。”
「振ってないよ。振っ、て、な、い。」

“おいおい。”
「あれは、ちょっと冷却期間を置いただけ。振ったんじゃありません。」

あれは失敗だったー。一生の不覚だわ。
　あれがなければ、今頃千冬と同じマンションで暮らすなんてことは
なかったはず・・・ってか、後悔先に立たず？

「浮気もの。」
“おーい、それはないだろう。”
「最近はヒロにまで手を伸ばして、ぜーんぜん構って
　くれないんだもんなぁ。」

あれ、返事が無いぞ。言い過ぎたかな。
「ごめんね、ちょっと調子に乗りすぎた。怒ってる？」

“いや、そんなふうに思ってたのかって。気づかなくてごめん。
うーん、今度、どっか行こうか。”

ううん、そんなつもりじゃないし、・・・なんて遠慮すると思ったら大間違い。

「じゃ、明日。帰りに。」
“速攻だな、瑞江。部活は？”
「ま、たまには早退もいいんじゃない。」
“知らないぞ、鬼部長。”
「大丈夫、大丈夫。」

　いやー、ぜんぜん大丈夫じゃないけど、景くんとのプチデートの
ためだったらどんな困難でもクリアして見せるわ。
“じゃあ、ル・タン？それとも・・・。”
「ラ・メールにしよう。」
“珍しいな。”

明日話してしまいたい。もうそれ以上は引き伸ばせない気がする。
そんな気がしてきた。

　それにこの話は、二人だけで話してへんに意地張って、
間違った方向に転がったりしたくない。
意地はるのは、もっぱら私の方だけどね。

うん、なんとなく、マスターの顔が浮かんだんだ、今。

　理由は聞かない。
とりあえずそういう詮索はしない。
言葉で伝えられたことが、本当のこととは限らないから。

　父さんや、元母さんとの関係の中で、僕はそういう小さな防衛線を
身につけた。

　まず、いろいろなことを聞いてから、その核心を聞いたほうが
相手が本当は何をいいたいのか、そこに嘘とか間違いは無いのか、
が分かる。

　本当はそんなことを言いたかったんじゃないのに、
勢いで言ってしまった。
それが人との関係にひびを入れてしまった。
そんなことになるのは、もういやだ。

　瑞江がどうして明日ラ・メールでなんて言い出したのか、
それは明日ラ・メールで逢えば分かることだ。
　でも、ひょっとするとこういうのって、僕の寿命が延びたってコトと
関係有るのかもしれない。

　もし、明日死ぬってことが分かっていたら、こんな先延ばしは
しないだろうから。

「なに、その半身の状態。」
入り口で半身・・・。どういうシチュエーション。

「携帯、終わったのかなあって。」

　僕には、ドアを閉めるっていう習慣がない。
ずっと一人に近い状態で暮らしてきたから、閉めて守りたいプライバシー
なんてものが無かったし、他に誰もいない家で、さらに自分の部屋のドアを閉める、
って言う閉塞感が嫌だったんだ。

　暗い部屋にこもっていると、またあの黒いものが僕の心に流れ込んできて、
その中に埋もれてしまうような気がしてた。
　だから、その習慣が今も続いてしまっている。
あれを見なくなって、まだたった一年しかたってない。
初めの頃は、よく千冬に怒られた。
そっちが恥ずかしくなくっても、こっちが恥ずかしいでしょ、って。

「入れば。」
「汗臭そう。」
「部活終わった後に、シャワーしてるよ。」
「じょうだん、じょうだん。」

ほんとか？ほんとに冗談か？　さっきあきらかに顔しかめてたぞ。

「ドア閉めてしてもいいのに。」
「別に隠すようなこと話してないし。面倒だし、あけたり閉めたり。」

髪の毛濡れてると、昔のお姫さんみたいだな。
で、何用。
おっと、もうちょっとゆっくりベットに座りなさい。どすん、ぎし、とか。

「なーに話してたの？」
おいおい。

「隠すようなことじゃないんでしょ。」

「退屈？」
「嫉妬。」
まじ？

「うそ、退屈かなあ。ちがうなあ、眠るまでちょっと暇。
　なにか話したいなぁ、と少女は思ってる。」
こらこら、もう少女の年齢じゃないだろ。見かけはそうだけど。

「今日なにあったっけ、割と変わらない日常だったな、
　と少年は一応頭の中を探ってみる。」
くっくっくっ、って笑うなよな。自分がやりだしたくせに。

「そういえば、小学校の頃って、よくラジオ聴いてたとかいってたよね、
　と少女は尋ねる。」
「物音のしない一人の家って寂しいかったからな、と思い出す。」

「寂しかったの？そんなこといわなかったじゃない。」
素に戻ってるじゃない。

「つっぱってたんだろうな。」
「いまは？」
そんなこと言わせたいの？しょうがないな。

「寂しくない。千冬がいるから、寂しくない。」
「ふふん♪」

ま、いっか。言わされた、ような気がしないでもないけど。

「ねぇ、久しぶりにお茶点ててあげようか。」
パジャマでか。どんなお茶だよ。

「えー、いいよ。」
「遠慮しない、遠慮しない。」
「先、風呂はいる。」
「だめ、今するの。」

ああもう、ウチの女どもときたら、なんてわがままなんだ！

　山の中腹、なんていうと怒られるかもしれないけど、
そういうところにある彼の学校より、
私がここに先についてしまうのは当然のこと。

まだヨシズ立ててある。
もう開いてるよね。ボードも出てるし。

「こんにちはー。」
暗っ。

「いらっしゃーい。今日は一人？」
「あとから景くんがきます。」
キリさん、最近三編みブームなのかな。

「よう、いらっしゃい。まだ夏服だなぁ。」
とりあえずカウンターでっと。マスター奥で何してたんだろ。暇そうだなぁ。

「まだまだ全然暑いですよ。」
よっこらしょっと。

「なんにする？」
「うーん、アイスティ。」
相変わらずジャズかぁ。でも今日はボーカル入ってるんだ。

「お嬢ちゃんもたいへんだな、あんなカレシじゃ。」
はぁ？

「なんだか、はっきりしねーだろ。ヤツは。」
「そうですね。でも、もう慣れちゃいました。」
私なんだかそんな顔してたのかな。
まあ、ちょっと、どう話したものか、悩みながら来たのは事実だけど。

「マスターはどうだったんですか？」
「オレ？オレはなあ、強引過ぎて失敗したかなぁ。」
へぇ。

「彼女いたんだ。」
「おいおい、それはねーだろ。これでも昔はもてたんだ。」
おっさんやるなー。ほんとかどうか確かめられないけど。

「結婚は？」
「してない。」
「だろうなあ・・・。」
「なんだよそれ。紅茶にタバスコ入れてやろうか。」
「うわー、それはカンベンしてー。」

がっはっは。

「一生一緒にいようと思ってた女とは、向うの親に反対されて
　結婚できなかった。身分が違いますってな。」
「逆玉？」
「まあ、そういうことになるかな。オレは向うの財産なんて
　どうでもよかったんだが、向うはオレが何にももってねー、
　ただの若造だってことが気に入らなかったみたいだ。」

“適当に聞いとかないと長くなるよ、マスターの話って。”
ご忠告ありがとうございます。キリさん。
「けっ。」

「で、どうしたんですか？駆け落ち？」
「残念ながら、そんなドラマチックなことはなしだ。
　今みたいに携帯も無い時代だったから、家の中に閉じ込められたら
　連絡の取りようもねー。
　そこまでされた彼女がかわいそうになって、オレは身を引いて、
　国も出た。そうしないと、また逢っちまうし、
　こういうしがらみのある国が嫌になったんだな。」

言葉にしたら短いけど、いろいろ有ったんだろうな。

「じゃ、ずっと独身なんだ。」
「冬は寒さが身にしみるぜ。」

“プリムローズのララさんに暖めてもらえばー。”
「キリよー、そういうこというとあっちが本気にするだろうがぁ。」

“いいじゃない。たまには。”
「もうアイツにタマはねーんだよ、っとイケネー、お嬢ちゃんの前だった。」
オヤジ、コロス。

「家族無くって寂しくないですか。」
「それ、前に景にも聞かれたような気がするな。」
そっか。

「この店は家みたいなもんで、常連やキリなんかは家族みたいなもんだ。
　だから、寂しいとかはおもわねー。・・・・それに。」

んーー、じゃわたしも家族？

「子供はいるんだよ。」
「えー！」
「世界を放浪して、日本に帰ってきて、それから十年近くたってから
　知ったんだな。
　あっと、これはあんまり人には話してねーことだから言わないでくれよ。」

「どうして私なんかに。」
「景のことで悩んでんじゃないのか、そんな顔だったぞ、店に入ってきたとき。」
ばれてた。

「お嬢ちゃんがうちに来るってことは、そういうことだろ。」
人生経験てやつですか。さすがですね。

「オレと彼女が引き離される前、もう出来てたってことだろうな。」
「どうやって分かったんですか。」
「その話はちょっとおいとこうや。
　客も入ってきたし、キリがくるくるしだしてるから。」
ほんとだ。踊ってるみたい。

「いいたいのは、だ。あんまり焦るんじゃないぞってことだ。
　アイツはいいやつだけど、それが悪いほうに働くこともある。
　そういうのって、大抵焦って何かしたときだな。
　若さって人はいうかも知れん。
　覚悟して生んだんだろうが、生んだ本人も、生まれた子供も、
　それなりに苦労を背負ってしまったわけだ。
　子供どうこうって言うのは、まあたとえ話なんだが、気持ちだけ先走って、
　将来がおかしなことにならないほうが、やっぱりいいだろ。」

「はい。マスターありがとう。大好き。」

止せよ、って言って、マスターは私の前をはずれ、厨房に引っ込んでいった。

「こんちわー。」

見なくてもわかる。
スポーツバックを下におき、彼がカウンターに手を突いて椅子に上がる。
毎朝電車で一緒なのに、改めてこういうところで合うと、
ちょっと違って見える。
白いシャツ、焦げたように焼けた腕。

「よう。女の子を待たせちゃイケネーなー。」
「キリさん似てないっす。」
ぷっ。

「女の子って言うか、もう・・・まあ、いいや。僕が悪いでーす。」
「ご注文はお客さん。」

わ、水、一気に飲んじゃった。氷まで。
で、何が“もう”でどうして“まあ、いいや”で終わっちゃうわけ。

「ふぉっふぉ。」
「はーい。マスター、豆の煮汁、イッチョウ。」
通じるんだ。ふふっ。

「そんなに待ってた？」
「そんなでもない。」
横顔好きだぞ、このやろう。

「体育祭のことでちょっともめたから、部活抜けてくるのも
　簡単にはいかなくて。」
「なにそれ、つながりわかんない。」
もめたっていうわりには、面白そうな顔してるし。

「今年はねリレーに出るんだよ。そしたら、部の女子が怒っちゃって。」
？？？？。
「その女子のカレシ、でもないのかな。まあ、仲がいいオトコがいて、
　そいつが去年僕と競ったヤツでね。」

「ああ、あのときの。」

行ったなあ。後で先生に怒られたなぁ。
　怒られたのと、景くんが久しぶりに走ってるのを見れたのを比べたら、
そっちのほうが上だからいいんだけど。

「なんで走らないんだ！って。」
「どうして？」
「ヒロを出すから。」

　うーーー。またこのオトコ、私の心をかき乱すようなことを
ぬけぬけといってくれる。

「アイツより早いヤツと競ったときのタイムもきちっと計りたいし。
　僕とだと最初から勝負にならないから、
　本当の本気になれないだろうと思う。」

くっそー。

「そんなに面倒見、よかったっけ。」
「人を育てる大切さ、アイツに教わった。」

だから優等生は嫌いよ。
だって、まっとうすぎて反論できないんだもん。

「こらー、カウンターでそんな顔するのやめてよね。
　お客さんが入りづらくなるじゃない。若いんだからさあ、
　もっとニッコリほのぼのしなさい。」

私、思ったことが直ぐに顔に出ちゃうからなぁ。
来年度の部長候補扱いされてるけど、こんなじゃとても無理だよ。

「橘花も体育祭あるんだろ。」
「うん。」
「何に出るの。」
「創作ダンス。」
「踊るの？瑞江が。」

「そうだよ。」
「想像できないなぁ。」

「失礼ね。ちゃんと踊れます。といっても、ヒップホップとかみたいな、
　ああいうんじゃなくて、もっと古風な、・・・舞踊っていうのかな。
　そんなのだけど。ほら、うちって伝統校だからＯＢがうるさいらしくって。」
「走ったりしないの。」
「そういうのが好きな人は、ほかにもいくらでも居ますから。」
景くんみたいにね。

「あとは、校歌の唱導かな。」
わからない？あ、そう。

「開会のとき整列して校歌を歌うんだけど、そのとき前に出て歌うの。
　お姉ちゃんもやったんだよ。」
「ひょっとして、ワールドカップの試合前にやるセレモニーみたいなあれ？
　アレサ・フランクリンとかみたいに。」
その人が誰かはしらないけど。

「体操服で歌うことを除けば、それに似てるかもしれない。」
「すごいな瑞江。そこだけ見に行きたいよ。」

　へへー、ちょっと嬉しい。・・・って、ほかはどうでもいいのか
このヤロウ。
「ひょっとしたら、歌うために生まれてきたのかもしれないな。」

あ、なんだろ。

いま、何かが胸の中ではじけた。いま、このタイミングなら言える気がする。

「あのね。相談したいことがあるって。いってたでしょ。」
「うん。」

あつーい。
もう少し涼しくなるまで、学校休みにしてくれないかな。
このあと部活かと思うとよけいい気がめいる。
教えるほうも大変でしょ、先生。休みにしようよ。

校舎が古くて、半ば文化財扱いになっている。
冬は長ーいオイルヒーターで暖かいけど、夏は窓を開けて換気するしかない。
こんなに暑いといくら慎み深い乙女とはいっても、
机の下でスカートをめくり上げてたりとか、下敷きで扇いだりとか、
それぐらいは先生も黙認してくれる。

でないと腐って死んじゃうー。

“じゃ、この続き訳してもらおうかな。えーと、坂井。”
“はい。”
がたがた。

“かわいいもの。瓜に描いた子供の顔。
　すずめの子が，人が舌を打ってねずみの鳴き真似をすると
　踊るようにやってくる・・・・。

清少納言の昔も暑かったんだろうか。
ああ、だめだわ。全然授業が頭に入ってこない。

などと半ば朦朧としながら、６時間目もそろそろ終わり。
チャイムだ！

“それでは今日はここまで。”
“キリーツ、レイ。”

「丘野さーん。もう直ぐに行っちゃう？」
「うーん。音楽室でちょっと頭冷やしたい。なにか用？」
なんだろ。

「文化祭のことで、ちょーっと話があるんだけど。」

「うちの部と掛け持ちになるから、あまり期待されてもこたえられないと
　思うけど。」
「ぇえー。丘野さんが仕切りに入ってくれると助かるんだけどなぁ。」
それどういう意味かなぁ、クラス委員。

“２年Ｃ組の丘野さん。２年Ｃ組の丘野さん。職員室まで来てください。”

なんだろ。
最近、呼び出し食らうような悪いことってしてないけどなぁ。
とりあえず私ってば、大人気ってわけですな。

「なんか呼ばれてるみたいなんで。」
よっこらしょっと。鞄は置いてこうか。

「う、うん。大丈ーぶ？」
なにその微妙な顔。私を引き入れるの躊躇した？
それならそれでいいけど。
まあ、普通の生徒は教師に呼び出されるの嫌がるよね。

「高見ちゃーん。」
「なーにー？」
「オニ清水部長に、呼び出し食らったから遅れるって言っといて。」
「りょうかーい。そのままズラかっちゃだめだよー。」

ほんとうに心当たりないんだけどなぁ。何なんだろうなぁ。
廊下をすれ違う人たちに、ことごとく見られているような気がするよ。
もちろん自意識過剰というか、錯覚なんだけど。
走っちゃいけないっていうルールだけど、走りだしたくなる。
ふふ、案外気がちっちゃいんだね、私も。

こらー、一年生邪魔だぞー。話しながらとろとろ歩いてるんじゃない。
お姉様は、理不尽な呼び出し食らって急いでるんだから。

「丘野センパイ、どこに行かれるんですか？」
おお、かわいい後輩達よ。

「職員室にねぇ。夕日の決闘。」
「ええっ、本当ですか？」
なわけないでしょ。もう、このお嬢さん達と来た日には・・・。
きゃっきゃ、笑うんじゃないの。

さあてと、ちょっと息を整えて。

年季の入った引き戸だなぁ。こうやってここで息整えるのって、
いったい何人目なんだろうな。

せーの。・・・ガタピシ言うな、このおんぼろ。

「失礼します。２年C組　丘野瑞江です。」
で、誰よ私を呼んだのは。

「おー、すまんな呼び出して。ああ、入らなくていいぞ。」
なあんだ、顧問の朽木先生か。

　職員室の外、ですか。わざわざジャケット羽織って。私ってそんなにＶＩＰ？

「さあてと。君にお客様がお見えだ。ちょっと応接室まで行こうか。時間は？」
「大丈夫です。部長には、遅れるって伝言を頼んでおきましたから。」

ああ、お客様ね。
じゃあ、ちょっとお嬢様スイッチ入れとかないと。

「橘花のＯＢの方でね。もちろん僕も直接は知らない。けれども、
　それなりに有名人だよ。」

せんせー、その説明では何がなんだかわかりません。
一応シチューなんだけど、中身はなんだか分からない、見たいな。
怖くって食べれませんーん。

さすがの私も、ここまでは来たことが無いな。
　あと校長室を制覇したら、この学校のほとんどの施設には
入ったことになるかも。
ノックするんだ。

“どうぞ。”
ん？男の声？　ＯＢっていったよね。

「失礼します。丘野瑞江くんをお連れしました。」
先生緊張している？
やっぱ、オトコだ、っていうか校長じゃない。

「ああ、入ってください。」
手を体の前でそろえて、斜め１５度の角度でお辞儀。

「失礼します。」
んー、私ってばお嬢ッポイ。

あ、もう一人いらしたんだ。このご婦人がお客様か。

「こちらは、当校の卒業生で沢良宜さん。まあ、座りたまえ。」

うわっ、この椅子無駄に深い。前のほうに浅く掛けるだけにしておこうっと。
この部屋、盾とかトロフィーとか、いっぱいおいてあるなぁ。

「突然お呼び立てしてごめんなさいね。」
何がなんだか。
「わたしは、もう３０年ぐらい前にこの学校で学んでいて、
　そのときコーラスをやっていたの。」

部のセンパイか。
派手って言うほどでもないけど、バリバリのキャリアって感じがする。

「それから音楽の道に進んで、今は現役を引退して、
　後進を育てる仕事をしています。」

「はい。」
「沢良宜先生は、東洋音楽大学の理事をしていらっしゃるんだ。」
どきどきしてきた・・・。
この展開ってひょっとしたら、ひょっとすること？

「丘野さん。卒業したら私の大学に来ない？声楽すきでしょう、あなた。」
・・・・・、あれ、なに言えばいいんだろう。
校長も顧問もニコニコしてるけど、なんか、
ワタシ、アタマノナカガマッシロデス。

「東京だから親元を離れることになるけど、そういう子は
たくさんいるから大丈夫よ。学生課のほうで全部面倒見てくれるわ。」

と、東京。

「そ、相談してみないと。」
「そうよね。もちろんご両親とよく相談してみて頂戴。」

そ、そっか。親と相談するんだ。別の人のこと思ってた。

「でも、あなた自身の気持ちはどうなの。」
　おちつけー、落ち着けワタシ。これはなにかの罠かも
、、、なんてことは無いだろうけど、ちょっと落ち着きなさい。

「私は歌うことがすきですけど、それを専門的に学ぶとか、
　そういうことまでは考えたことが無かったので。
　この学校を卒業したら、そのまま上に上がるつもりでしたから。」
「もったいない。」

もったいないお化け？

「あの、いまいち事情がよく分からないので、
　どうしてこういうお誘いを頂いたのか、教えていただけませんか。」

赤い唇。
「そうよね。ワタシもいい年をして気が焦っちゃって。」
活力に溢れた表情。校長や顧問とは違う人種の人だ、この人は。

「いま、日本で声楽を学んでる学生って何人ぐらいいると思う？
　なーんていってもわからないでしょうけど、千人は下らないはず。
　みんな音楽が好きで、大学に進学してくるの。ある程度の技術をもってね。
　でも、大抵はそこで終わり。
　そこからプロとしてやっていける人は、年に５人も居ないでしょう。」

「厳しい世界なんですね。」
「そうね。でも私はその５人を育てたいわけじゃない。
　もっと上。世界に通用する歌手を育てたい。」
「ひょっとして、それがワタシですか？　ありえないですよそんなの。」
「そうね。」

言ってることが分かりません！

「そうじゃないかもしれないし、そうかもしれない。
　そんなこと誰にも分からないわ。
　でもね、もしあなたを他の学校にとられたら、

　私、悔しくて枕引き裂いちゃうと思う。」

「でも、わたし、コンクールなんかに出たことも無いですし、
　全く無名なのに。」
「職業柄、そしてＯＢとして国内にいる限り、我が合唱部の定演は
　必ず見に行くようにしているの。」

ああ、来ていらしたのか。

「そのときソロを演ったでしょう。それをみて、毎年いい子が入ってきて、
　今年も安泰だなって。伝統の力は大きいなと思った。でもそれだけ。」

だよね、普通は。
で、そんなふうに身を乗り出されると、引いてしまいそうになるんですけど。

「芸術家って言うのはいろんな趣味を持つ必要がある。
　私の場合は、美術がそう。自分でも少し描いたりするし、見たり買ったりもする。
　で、少し前にある新進画家の個展を見に行ったの。
　ああいう、ぐんぐんと空高く上がっていこうとする若い人の絵って、
　本当にいいわ。見てるだけで力をもらえるような気がする。」
ひょっとして、あれ。あの時いらしたの。

「ふふーん。どうやら心当たりがあったみたいね。
　あなたが絵の前で歌ったとき、私もそこにいたの。
　伴奏も何もなしでよ。
　突然歌えって言われて、はいそうですか、なんて普通は歌わないよ。
　私だってどうだろうって思うもの。
　未だ洗練されてはいない。経験も十分には積んでいないし、声量も足りない。
　けれども、音楽に関わった人だったら、絶対にわたしと同じ感覚を持っただろうな。
　ひとことでいうと、鳥肌が立った。
　こんなところでこんな子に出会うなんて、私はなんてついているんだろうって。」

「こういうことを本人の前でいうのはよくないかもしれないが・・・。」
　校長先生、その沢良宜さんへの目配せってなんですか。
しかも座りなおして。

「沢良宜先生がこの学校に在籍していたころ、私は一教師だった。
　合唱部の公演もよく聞かせていただいた。
　さすがに沢良宜先生はお上手でした。」
「・・・で、ほめておいて落とすんですか。」

はは、校長先生図星だったんですね。

「技術はともかく、スター性は丘野くんの方が上だと思いますよ。
　お姉さんの満ちるさんと二人で在籍していたときは、
　ある種の黄金時代でしたな。ねぇ、朽木先生。」

「そうですね。学校でやっても、外でやっても、入場制限が大変でした。
　今年は合唱部に入るために、ウチを受験した生徒もかなりいましたからね。」

それでなのかな。
下級生がやたら引っ付いてくるのって。

「留学も出来るわよ。パリ、ミラノどこがいい？」
「ちょ、ちょっと待っていただけますか。」

　拒否感はない。っていうか、どっちかっていうとワクワクする。
でも、
「急すぎて。混乱してます。」
「わかります。だから、よく考えてお返事が欲しいな。
　もちろんいいほうのね。」

玄関までお見送りするときに話をした。

　彼女は音大を卒業したあと、海外に留学し、いくつかのコンクールにも出て、
賞も取った。
でも海外では日本人に目ぼしい仕事がなかった。

　なかば打ちひしがれて帰った日本で、暫らくは歌手として仕事をしたけど、
何か見えない高みを目指して頑張っていたときの情熱は消えてしまった。

だから、自分の思いは断ち切った。

　黒塗りのリムジンだ。しかも運転手つき。

「私に出来なかった夢を、託せる人を探し続けて。
　もちろん、あなたが初めてではないんだけど・・・・
　そういう経験を経て、あなたに出会ったって気がする。」

　ドアが閉じられ、運転手が後ろを回って自分の座席に乗り込もうとするとき、
名残惜しそうに彼女はウインドウを下げた。

「わたしの下に来たからって、あなたが成功するとは限らない。
　私の夢はかなわないかもしれない。けれども、
　人生って何かを成し遂げるための価値ってあると思う。」

「好きな人と別れてもですか。」
わたしってば、思わず大胆なこと言っちゃった。

「そう・・・。恋してるのか。私はね、音楽に恋してしまったの。
　あなたが歌うときって、いつもその人に向けて歌っているの？」

えーい、もうどうにでもなれ。

「はい！」
「きっと、だから光を放って見えるのね。」

　後ろの窓に、前をじっと見据えて座っているあの人の姿が
小さくなっていった。

「なんだか大胆なこといってたね。」
うわー、首筋さむー。

「聞かなかったことにしてください。」
「例の彼だろ。知ってるよ。」
「えー、どうしてですか。」

「顧問だからね。指導は３年にまかせているけど、それ以外のことは
　いろいろと耳に入ってくるし、時には対外的な仕事もしないといけない。
　ある時期、彼は有名人だったし、君は何かと事件を起こす子だから、
　その分わたしも気にしている。」

すみません・・・。

「うらやましいね。その年齢で、そこまで思える彼がいるってことは。」
「幼馴染なんです。」
「そりゃ長いねー。」
「えぇ。気が遠くなりそうです。」

これって、学校の玄関口に立ってする会話なんだろうか？

長い話だったな。
「お父さんとお母さんには？」
「まだ話してない。しなくていい心配ならさせたくないから。」
「じゃ、僕って今、責任重大なんだ。」

“Waltz for Debby”だっけこの曲。Bill Evansの。
まるでピアノが歌っているような演奏だな。
　人の一生を左右するようなことを考えるときに、聞く曲じゃないような気がするけど、でも、こういう場面のバックに流れるのって悪くないかも。

「僕は反対。」
「え・・・。」
「瑞江が東京に行ってしまって、それからパリ、ミラノ。
　そして世界の歌姫なんてなって欲しくない。」
「無理だよそんなの。私、そんな才能無いもの。」
「いいや、絶対成功するね。なんといっても、ファン第１号の
　僕がそういうんだから間違いないよ。いや、１号はミチルさんかな？」

そんな不安そうな顔しないで。

「こうみえても、僕は瑞江とずっと一緒に歩いていけたらって思ってる。
　っていうのは、前にも話したっけ。」

あー、はずかし。

「だから瑞江がそんなふうになるのはいやだ。」
原始的にはそう。石器人としてもそうかもしんない。

「でもさ。瑞江のそういう姿を見てみたい気もする。
　スカラ座でヴェルディを歌ってるところ見たら、すごく誇りに思うと想う。」
かろうじて知っているのがそれだけ。

「だから無理だって・・・。」
でも、僕は矛盾だらけの現代人だ。

「無理だったら僕にとっては好都合だし、うまく行ったら、
　それはそれで嬉しいし。」
「うーん。なんだか分けわかんない。景くんの言うこと。」

瑞江の未来は、瑞江のためにある。
そういうときに、僕の事なんか気にしてる場合じゃない。
それは当たり前の話で、でも、そんなことを言うと瑞江はへそを曲げると想う。
僕も、唐突な話で困惑した。でも、少しずつ分かってきた。

「一緒に、東京に行って欲しいんだ？」
「・・・・うん。」
気持ちを、いっぱいいっぱいに溜めちゃって。
５年ぐらい昔に戻って、小さな女の子になったみたいだな。

「パリや、ミラノも。」
「そんな先のことまでは、今は分からない・・・。
　でも、景くんには景くんの人生があって、・・・なんだか、
　それを私に下さいって言ってるみたいで。
　まだ高校生なのに、そんなの早すぎるよ。」

あー、あっ、あ。それ。

「ね、も一回言ってくれる。」

「景くんの人生を、、、、、わたしに下さい。」

「それ、ありかもね。」

こらあ、泣くな泣くな、こんなとこで泣くな。

「どうした嬢ちゃん。こいつがなんか苛めるのか。」
ひどいなマスター。

「大じょぶですマスダー。ちょっどかんどうしで、だいちゃいました。」
「なんとなく分かるけど、ひでえ日本語だな。」
「はいティッシュ。」

ぎょえーキリさん、いい雰囲気のところに箱ごとティッシュですか。
瑞江もそれ使わないでハンカチ出せよ。

「ほーら、ココアだ。これ舐めてちょっと落ち着きな。」
「しゅみません。頂きます。」

嬉しそうな顔しちゃって。

「ねぇ、本当にいいの。」
そうだなあ。

「実現させるまでには、いくつかクリアしないといけないことがある。
　瑞江のお父さんお母さんとか、千冬とか。
　ちゃんと話さないといけないし。
　ウチのマンションも処分することになるだろうね。」
「うそ！あそこ売るの。」

「誰も住まないウチを残しておいてもね。」
「でも、景くん、ようやく僕にもふるさとらしいとこが出来たって、
　喜んでたじゃない。」
「そうだけど。九州の父さんに、あの家残してさらに東京に住むから、
　って言うのは、ちょっといいずらいな。」

「そっか・・・。ならいい。私やっぱりやめる。」
ばあか。そんなちっぽけなことで止めてどうするよ。

「まあ、あれじゃない。瑞江の家が僕のふるさとになれば良いわけで。
　それもお父さんお母さん次第なんだけど。」

なんだそのでっかい目は。
「今日、なんだかすごく頭良いね。」

泣いたり、思いつめたり、笑ったり。感情過多だよ。おなかすくぞ。
つーか、

「普段はバカってこと？」
「明らかに。」

「ねぇ、あげる人生ってさ、半分ぐらいにならない？」
なんだよ、やっぱりね見たいな顔。

　でも、多分、瑞江はもう決めてたんだと思う。

　僕が多分反対しないだろうってことは、無意識に分かっていて、
どっちかって言うと、瑞江の両親に言う勇気の後押しを、
僕にして欲しかったんだと思う。

　僕の母さんも、千冬もそうだったけど、女の人って、
一度こうって決めてしまったら、後は最後まで行ってしまうような
ところがある気がする。

そういう強さって男にはない、っていうか、少なくとも僕には無い。

だから、瑞江の満足そうな顔に、僕は少し複雑な気持ちになっている。
もし、本当に、瑞江が海外に行くようなことになったら。
その時は、僕は多分一緒に行く、なんてことは無いだろう。

　僕をもう必要としないほどの強さで、
彼女は自分の道を歩いているだろうから。

　いくらこころを許しあった中だからって言って、
私は彼のようにドアを開け放しにはしない。
まだ一応、身分は高校生なんだし。
乙女の恥じらいとたしなみというものが有ります。
それに、彼にはあまり聞かせたくない話も、時々かかってきたりする。

例えばこんなふうに。

「ラフィエットが出国するようです。」
「行く先は？」
「日本です。」

「やっかいね。打ち落とす？」
「はは、他のご乗客の迷惑になりますので。それはちょっと。」

「目的とかは、わかるかしら。」
「そのあたりは、今あちらで調査させているところです。
　それで分からなければ、私が空港で直接会って問いただしてみます。
　状況によってはそのまま強制送還ということも可能ですから。」
「あら。過激ね。」

「打ち落とすほうがよほど過激でしょう。ポケットに葉っぱを少し
　入れておくだけですから。
　彼は知らぬというでしょうが、みんなそういいますからね。」

まあ、その当たりは寺島に任せておけばいい。
　調査会社にとって、正確に言えば調査と工作の会社なのだけれど、
だからそういう操作はお手の物だろう。

「では、お休みなさいませ。」
「いつもありがとう。」

Ｐｉ！

普通に見えるこの携帯も、実は特注品だ。

通信は全て暗号化され、一旦寺島の会社、というか私の会社、
のサーバーを経由して複合化され、一般の通信回線に流れていく。

ただし、寺島との通信は彼の携帯に入るまで暗号化されたままだ。
しかも私の掌紋と声紋の組み合わせ以外では、この機能を使用することは出来ない。

・・・と寺島が得意そうに言っていた。
オトコって、どうしてこんなにややこしい機械が好きなのかしら。
わたしには、チンプンカンプン。

ふう。ラフィエットか。
　あの男にいい印象が無いのは、いろんなことが重なって起こった、
ってことに関係してるんだろうな。
私が家出したり、彼の母親らしい人がわかったり。
冷静に考えればそれほど重大なことをしたわけじゃない。

　半世紀以上前のスケッチと、ワタシが似ているってことで、
妄想を膨らましただけの男だ。
それが、正解に近かったのは問題だけど。

まあ、今回も寺島に任せておけば大丈夫でしょう。

お茶でも飲もうかなぁ。
ドアを開けて、廊下を見ると、・・・景の部屋の明かりは消えている。
リビングかなあ。

リビングにもキッチンにもいなくて、お風呂に入った様子も
外に出て行った様子もない。

カーテン、それに窓が開いてる。
ベランダかな。こんな夜になんだろう。

「どうしたの。」
「ん。」
なんか、考え事してる？

「高校卒業したら、東京へ行くかもしれない。」
唐突に、なんの話しだろう。

「それだけじゃ、わからないよ。」
なんか、子供をなだめすかしてるお母さんみたいだな。

「うん。瑞江がね、東京の大学から、音楽の勉強しに来ないかって
　誘われたんだって。たしか東洋音大っていってたかな。
　まあ、大学生なんだから東京に一人暮らしって言うのは、
　珍しくもなんともないんだけど、行くか行かないか、
　どうも僕が基準らしくって。」

苦笑いね。
そうだなあ、その気持ち分からなくはない。
だって、私もそれで景を死んだことにしてしまったもの。

それでどう返事したの？って、聞くまでも無いか。
ＯＫして、そうしたらここを出て行くわけで、もう戻らないかもしれない。
　そしたらこの家はもう要らなくて、と思ったら、なんとなくベランダから
夜の蒲生の街を見渡してたってとこかな。

「景は、何処に住みたい？」
「ぇえ？話し早すぎない、それって。」
「どこでもいいよ。
　私はもともとこの家に住むつもりは無かったんだし、

　景がそう決心したんだったら、ここを引き払って、どこへでも行っちゃおう。
　小さい頃から転居には慣れてるし。今度は一戸建てにする？」

「そんなことまで未だ考えてないよ。向こうのご両親には、
　多分今夜話してると思う。」
ほー、そういう順番なんだ。
ミズエちゃんは音楽よりも景が大事か。乙女だなー。

「まさか二人で住むとか言うんじゃないでしょうね。」
「それはない。」

「一戸建てに３人。」
「それ、僕死んじゃうと思う。」

「失礼ね。こんなにやさしい姉とかわいい彼女との同居なんて、
　めったにない組み合わせなのに。」
・・・あら、いつもだったらここで“ありえねー”とか
言うところなのに。

「どうしたの。」

川沿いの道路をクルマが走って、遠ざかっていった。
ライトが、夏の間にのびた草を明かりの中に浮かび上がらせている。

　このあたりは夜になると出歩く人は少なくて、
仕事帰りのサラリーマンが“光が丘”って言う名前の住宅地に帰っていくぐらい。

数年前、わたしもそこで暮らしていた。

　その時の父もこうやって歩いていたのか、それともクルマで帰ってきたのか、
もう思い出せない。
無かったことにしてしまった記憶って、案外思い出さないもんなんだな。

「瑞江は、きっかけがどうあれ、自分の進むべき道を
　見つけたんだと思う。そうでなければ、僕に相談なんてしない。
　でも、僕はただ成り行きで東京行きを考えたってだけだ。
　前はここから逃げ出したくて、今は人から誘われて。
　僕は一体何がしたいんだろうって、考えてた。」

「そっかあ。景もそういうこと悩むような年になったんだね。」
「千冬は？」
私？
「私はねえ・・・。私の背負った宿命があるから。
　この先どうするとかは、考えたくても考えられないなぁ。」
電車だ。東へ走っていく。二人であれに乗って、一度はこの町を捨てたんだった。

「景は、自分のやりたいことを自由にすればいいんだよ。」
「うん。」

　世の中には、何も考えずにただ成り行きで生きていく人がいれば、
彼のように悩む人もいる。
　そして私だとか、他の誰かが彼にこうしろって言っても聞きはしない。
自分で解決するしかないこと。

「わたし達は三百年生きるんだよ。きっとどんなコトだって出来る。
　だから、今はミズエちゃんのことを支えてあげてもいいんじゃないかな。

　それが景の本当の目的でなかったとしても、
　人生の何年かがそういう時期であってもいいと思う。」
「何。今日は分かったようなこというんだな。」

「あーら。私は景の姉ですから。」
「・・・忘れてたよ。いつもあんまり子供っぽいから。」
こら！
「イテ。」

わかるんだよ。
ミズエちゃんの気持ちがすごく分かる。だから、そうしてあげればいいと思う。
　私の側には景がいて、満ちてくる潮のように、こうして私の寂しさを
満たしてくれる。
　古代から続く同族を束ねる象徴としての私の役割は、とても孤独で不自由だ。
養い親たちはそれを理解してくれなかった。景は私の寂しさに気づいて、
手を伸ばしてくれた。私を必要としてくれた。

景がいるから、私は微笑んでいられる。
ミズエちゃんも、きっと同じなんだろう。

　そしてわたしと景は、これから長い時間をともに暮らして
いくんだから。
しばらくの間、瑞江にこの場所を譲っても、私は構わない。

「そうだ。景。ラフィエット覚えてる？」
「ラフィ・・・。ああ、あのバカオヤジ。」

はは、景もいやな思い出と結びついてるんだろうな。
早く忘れてくれないかな、あれは。

「日本に来るみたいだよ。」
「なにしに。」
「さあ分からないけど、面倒を起こしてくれないことを望むわ。
　非常手段はあくまでも非常の手段なんだから。」

　バカなのか、大胆なのか。

　大人しくボストンで肘掛椅子に座っていてくれればいいものを、
十何時間もかけて飛行機に乗って、わざわざ再入国してくるとは。
あまり私の雑用を増やして欲しくないものだ。

にしても人が多い。
どうして人は、こんなに移動したがるものなのだろうかな。
しかもカートに山のような荷物を積んで。
それだけ暇な人間が多いということだろうか。
短い一生の何分の一かを、こういう移動に費やして人は生きていくということだな。

さて、一旦この人ごみに紛れられたら、探し出すのには手間がかかるだろう。
飛行機から出た直後を捕まえるべきだろうな。

念のためにアメリカから今の写真を遅らせたが、さすがに変わってない。
いかにも健康そうなアメリカ親父そのもので、
シルクハットよりはテンガロンハットが似合いそうだ。

前の代のラフィエットは、もう少し繊細そうな雰囲気だったが、
当代のラフィエットは外面的には母親の方の遺伝子を受けついたのだろうか。
　すくなくとも美術を扱っているというよりは、牛でも追っかけてろ、
というか。

　私がこういうところをうろうろすると、ウチの警備員が
張り切りすぎるのが眼に見えて分かる。
制服には一定の抑止効果があるんだから、普段どおりにすればいいんだよ。
必要以上に空港の中に緊張感をばら撒くんじゃない。

あそこに一つ、そしてこちらに一つ。
カメラが見つけるのが早いか、私が直接目視するほうが早いかだが。

“寺島主任。”
おっと、インカムか。

「なんだ。」
“２７番到着口に要観察人物が写りました。”

「Ｒだな。」
“はい。Ｒです。”
「了解した。そのまま監視を続けてくれたまえ。」

ブリッジのカメラの方が早いのは当たり前か。
穴倉からぞろぞろと、おいでなすった。
おそらくこの瞬間、日本で一番外国人密度が高いスポットだな。
いたぞ。

「Ｍｒ。Ｍｒ．ラフィエット！」
くくっ。まさかこんなところで呼び止められるとは思ってなかったろうな。
きょとんとした顔して。

「ミスター。日本へようこそ。」
「これは寺島君。こんなところで逢うとは。
あなたはどこかに行きますか、それとも日本に戻りましたか。」
とぼけてるのか、ぼけてるのか。

「お待ちしてましたよ。」
「待ってた、私を？こんなところで。それは、ゲートの外でしょう。」
お、案外冷静じゃないか。

「私は特別なパスをもっているので、ゲートの内側にも自由に入れます。
あなたが日本にくると聞いて、待っていました。
目的についてお話いただけますね。」
ああ、事情は了解したというような顔だな。

「そうでした。あなたはある特殊な職業の人ですね。
・・・ところで私の日本語、おかしないですか。」
「問題ないですよ。」
「あなたと話していて、だんだん慣れてきました。
　さてと、もし理由を話さないと、・・・どうなります。」
「本国に送還される。ただし、二三日はあまり環境の良くない部屋に
　泊まらないといけなくなるかもしれない。」

「ブラックリスト入りですか。それは避けねばなりません。
　でも、私のいうこと信用して大丈夫ですか？」
いや、その日本語はおかしいだろう。

「例えば“観光”なんて答えだったら強制送還ですね。」
「分かりました。」

“音声レベルは良好です。そのまま会話を続けてください。”
そこまで大掛かりにしなくてもいいんだがな。

まあ、記録はとっておくに越したことは無い。

「あなた知ってますか。キャフェ　ラ・メールのレンさん？」
知ってるも何も、
「知っています。」
価値の全く分からない絵まで買わされた。

「彼女をボストンに招待します。」
「ボストン？」
「そう。彼女に絵の勉強をさせたい。ボストンには日本美術の
　膨大なコレクションが蓄積されている。そしてニューヨークも近い。
　彼女の絵の方向性にぴったりの場所だ。」

そうなのか？
そういうことは私には分からないな。千冬さまが何らかの結論を出されるだろうが。

「彼女を支援する理由は？」
「それは、一言ではいえないね。どう、あっちのカウンタで
　コーヒーでも。」
「あいにく職務中なので。」
「やれやれ、日本人は固すぎるよ。」

　その肩をすくめる、というのはやめろ。なにかこっちが本当に、
未開な蛮人とでも言われているような気がする。

「私は彼女の才能に注目している。けれども、何もしないままで
　才能は伸びないし、芸術家にとって旅は重要だ。
　旅を通して、自分の新たな世界を引き出した画家は沢山いる。
　そして、彼女は今、今までのストックを大量に吐き出している。
　ストックだけで描いているといっても言いぐらいだ。
　でもこのままではいずれ空っぽになる。
　そうなる前に、何か別の空気を吸収したほうがいい。
　その手助けをしようというわけだ。」

先入観なしに、フラットにきけば悪くないはなしだな。
「それを貴方がやろうというのですか。」
だからウインクもやめろ。気色悪い。

「ボストンでじっとしてるのにも飽きた。
　世界中を旅して回ったグランパの遺伝子かもしれない。
　彼の日記を読み直していて、改めて考えた。グランパは本当に日本を愛した。
　日本とアメリカの架け橋になろうとしていた。
　時代を越えて、グランパの心に触れて、その志を立派だと想った。
　そういうことだね。」

そろそろ、このエリアから他の乗客がはけてきた。
これ以上立ち話を続けるのは不自然だな。
追い返すか、受け入れるか、決めないといけないタイミングだな。

「あなたは監視されている。わかっていますね。」
「もちろん。
　あまりいい気ではありません。こんなところでキミが待っているぐらいだから、
　そういう扱いをされているというのは、よく分かっていますね。」
いいだろう。

「お引止めして悪かった。その代わりといってはなんだが、
　一月ばかりステイできる部屋を用意してあります。
　もし他に当てが無ければ、そちらに滞在されてはいかがでしょう。」
「ほう、それは何処のホテルですか。」

「横浜、オドネルホテル。」

「それで、交渉は成立したの。」
“はい。喜んで、というほどのことではありませんでしたが、
　彼の祖父も多少のゆかりのあるホテルですし、
　滞在費がこっちもちなので嫌々というのでもないようでした。”

「彼、嘘はついていないのね。」
景はさっき、ベランダに出た。
正確に言うと、窓が開いて、ベランダに出る音がしたということ。
景がベランダに出るときは、何か考え事をして、すっきりとしないときだ。
一年一緒に暮らして、そういうことが徐々に分かってきた。

“おそらく、ですが。
　モニタリングしていたオペレーターが、嘘をついている兆候は
　無いと言っていました。サーモグラフィに体温の変化無し。
　発汗もなし。彼特有の右肩を頻繁に上下させる癖もなし。
　今後も監視は続けますが・・・。“

「いいでしょう。何か特段の理由が無いかぎり、
　彼の行動を制限する必要はありません。
　でも、本当に蓮さんを連れて行っちゃうのかしら？」

“さあ。本人の考えも有るでしょうし。”
「わたしとしては、いい話ではあると思うわ。」

“一般的にはそうでしょうね。”
「ふふ、一般的にはね。他には、何かある。」

“いえ、以上です、”
「そう。」

ベランダに行きたい。
「じゃあ、ごくろうさま。いつもありがとう。」
“いえ、では失礼します。”

失礼します、の句点を聞き逃したかも知れない。

ベッドから机まで、ケイタイを置きに行くのももどかしい。
いつもいつもそういうのじゃないけど、今夜はそんな感じなのだ。

見上げると満月だった。
多分、こんなふうに感じるのは満月の所為だろう。
きっと私の血のどこかに、大昔に狼に噛まれた痕跡が残っていて、
満月のたびにその血が疼きだすのだ。

・・・あれって、西洋の話だっけ。
できるだけさりげなさを装って。

「月、綺麗だね。」
「・・ああ、満月か、どうりで下が明るいと思ったよ。」

「そんなに違うもの?」
「うん。ほら、向うの森。暗いときはシルエットすら見えないけど、
　こんもり盛り上がって見えるだろう。」
「どれー。」
「ほらあそこ。」
とかいって、側によって腕に抱きついちゃう。なかなかやるなー、私。

「河原でキラキラ光ってるの何？」
ほら、あそこで細く光ってるのがあるじゃない。

「ススキの葉のこと？夏の間にかなり伸びたんだな。
　風があると、風の動きに合わせてうねって見えるんだよ。
　風ってずっと吹いてるように思うけど、強弱とか、波みたいなのもあるんだろうな。」

「変な高校生。」
「そうかなぁ。」
「普通、そういうこと、スラスラ出てこないでしょ。」
考えてる。考えるところがまた、彼らしい。

「子どもの時から、よくこんなことしてたからかな・・・。」

そっかぁ。そうだったんだぁ。
　ずっと一人だったものね。そういうのって、
ミズエちゃんがいるからとか、関係無かったんだね。

みんなあなたが好きで、あなたのことを気にかけて居るのに。

♪♪♪

「何？」
あー全くもう。
「メール。音が鳴るようにしといたんだけど・・・。」

　何もこんな時に鳴らなくても。ちょっと使い方覚えたからって、
うれしがって音楽を設定しちゃった。
　メールだから後でもいいんだけど、来たと想うと何か気になるし。

　書留だと、受け取るのに家に居ないといけないのが面倒だからって、
メールにしたんだけど、本当に便利なんだか不便なんだか。
何でも自分でやるって、自由だか不自由なんだか。

　こんな財団の報告書なんて、本当に見ないといけないんだかどうなんだか。
収支報告に短観レポート、社会貢献事業、その他協賛金、慈善事業、エトセトラ。
まだまだ分からないことばっかりなのに・・・。

いや、ダメダメ。義務は果たさないと。
八つ当たり気味になってるぞ、千冬。それで困る人がきっと出てくる。
昔はそんなこと、気にもしなかったけど。

またこんなに一杯並べちゃって。
「食べきれないよ、とてもじゃ無いけど。」

「あなたがひと月に一度しか帰ってこないからでしょ。
　普段ちゃんとした食事してないんだから、家に帰ったときぐらい、
　バランスのとれたご飯食べなさい。」
頭っから決めつけてるし。

　でも、この茶碗笑っちゃうなあ。中学生頃から使ってるやつだよ。
なんだか、子供っぽいの。だからって、敢えて買い替えてくれなんて、
私も言わないけどね。

　事前に帰るって言わないと怒られるし、言ったら言ったで
食べきれない料理を並べられて地獄だし。難儀なひとだわ、この人も。

「蓮、おかえり。」
を。

「ただいま、おじいちゃん。」
「また、やるんだってな個展。」
「うん。招待状持ってくるから。」
「うちには置かんのか。」
「全部売れちゃって、手元に一枚もないんだぁ。」
「そうか。そんなに売れてるのか。良かったな。
　まあ、ゆっくりしていきなさい。」
「うん、ありがとう。」

とはいったものの、廊下に立ったまま半身で声をかけられて、
そのまま立ち去られて、本当に歓迎されてるのか素直に喜べないよ。

　名前が自慢の我が家の娘が、未婚の母になってその子どもは
初孫なんだが、曰く因縁を考えると素直に可愛がれない。
そういう態度が子供のときからすごく嫌だった。
だから今もこのじいさんと話すのは苦手。

　ばあさんなんて、殆ど顔をあわせようとしないから、
そっちの方が付き合いとしては楽なんだけど。

「おじいちゃん、あなたが載ってる雑誌買ってたわよ。」
へー。そうなんだ。
　あれって、でもあの年代のじいさん向けの雑誌じゃないぞ。
どうやって知るんだろうな、そんなの。

それよりも、
「こんな面倒くさいものよくつくるよねえ。」
しいたけに鶏肉、エビ、銀杏、ユリ根、最後に三つ葉。温かくておいしい。

「これの作り方ぐらい覚えておきなさい。」
「いいよ、私はお母さんの食べるから。」
絵描きには絶対ムリ。こんなの頭に入れる余地がない。でも、美味しい。

「それで、今日は何？」
母上。するどいです。でも米粒噛んでるときに言わないで。
「だって、今月２回目だもの。こういうときは大抵お金がらみなんだけど、
　あなた最近絵も売れてるみたいだし。」
使う暇もないしね、ははっ。

「実は相談したいことがあるんだけど、、、もうちょっとあと。
　食べ終わってからにしようよ。」
「なんなのそれ。ご飯の味が変わるような、いやーな話題なの。」

どうだかなあ。
でも、母さんにはそうかもしれないな。
そか、こういうみそ汁なんてのも食べられなくなるんだ。
あっちにいっちゃうと。

母さんは、ずっとこの家に居るつもりなんだろうか。
この古くさくて窮屈な家に。

　飴色になった太い木の柱。重みのある障子の桟。子供の頃から
目にしていたそれは、外の世界とは全然違っていた。
割り箸かと思うような細い柱は、何を支えているでもなく。
ただコンクリートの箱のしきりに使われているだけ。障子なんて目にすることさえまれ。
いい加減なドレープのカーテンを開けて、閉めて。

そういえば、景がいつか言ってな。私の絵は窮屈だって。
この家と、そこから逃れようとして逃げられない私。私の絵は私そのものか。
だとすると、ボストン行きなんて逆効果かもしれない。
行って帰って来たら何も描けなくなってたりして。

「変わったとは言ってたけど、本当に変わったわね。あなたの描く絵。」
「来てたの？！」

「招待状くれたじゃない。」
「そりゃあ、渡したけどさ。その後何にも言わなかったじゃない。
　あれから・・・何回か帰って来てるよね、私。来なかったかと思ってた。」

「だって、あなた嫌そうなんだもの、世間話以外の話って。昔から。」

△＊□×％＄＆＃／＞＠￥・・・・・・あちゃー。

「そんなに露骨に嫌そうだった？」
無言で頷く母。乙女かあんたは！

「そういうところも含めて、変わったのかなあ。何が有ったか知らないけど。」
聞かれてもいわない。

「画廊の人には挨拶しておいたわよ。内田さんていったかしら。
　うちの蓮がお世話になっております、って。一度言ってみたかったのよね。」
「まじっ！　あの野郎、私には何にも・・・。」
くそー。

「いっそのこと、訪問着着ていけば良かったわ。」
遊んでる。私をネタに遊んでる、こーの母親。

「はい、お茶。」
煎茶。久しぶりだ。

「そろそろいいでしょ。」
そうですね。観念しますか。

「ボストンへ行かないかって話が有って。絵の勉強に。」
「ふーん。あなたパスポート持ってたっけ？母さん、預かってないよねぇ。」
はい？

「少なくとも２、３年は帰ってこないと思うんだけど。」
「青い目のダンナさんとかいやよ。これ以上この家で
　ごたごた起こしたくないからね。」
私の言うこと聞いてる？母さん。
つか、その程度？

「行ってもいいの？」

「それって、母さんに許可を求めてるの？」
何きいとんじゃ！　それ以外に何が有る！

「そういうとこは昔のままね。すーぐ膨れるとこ。」
母上、勘弁してください。私も随分悩んだんですから。

「お父さんに似たのかなあ。私は日本の外に行くなんて思いもよらない、
　って感じだけど。あなたはそうでもないんでしょ。
　絵が描きたいから外国に行く。そこがどんなところかなんて考えもしないで。」

「寂しくない？」
「寂しいわよ。でも、そんなことであなたが立ち止まったりしたら、
　母さんつらいわ。だって、あなたはもう大きくなって、
　自分の力で食べて行けるようになって、母さんがしてあげられることって、
　こうやってたまーにご飯を作ることぐらいだし。」

涙。

「子供の成長って楽しみだけど、寂しさでもある。」
母さんの涙。初めて見た・・・。

「でも、母さんに比べたら、まだまだよね。だって、
　あなたぐらいの年にはもう、あなたを抱っこしてたんだから。
　それに比べたら、留学なんて大したことじゃないわ。」

変な比べ方。

　もし母さんが普通に結婚して、普通の家庭で私を生んでたら、
私はこうはならなかったんだろうなあ。

「で、いつ立つの。」
「まだ、決まってない。行くかどうかも決めてなかったから。」
「そうなの。ふーん。
　じゃあね、一度だけ親孝行して行きなさい。あなたの絵のお金で
　温泉につれてって。箱根がいいなあ。格式のあるいい旅館がいっぱいありそうだし。」
「はいはい。箱根だろうがハワイだろうが、どこでもつれてって上げます。母上様。」
「ハワイはだめ。多分食事でげっそりするから。」

ははは、母さん的にはそうかもしれない。

「洗い物、私がやるから。」
「いいわよ、いまさら点数稼がなくても。」

よっこらしょと。
「バイトでずっとやってるから。それに、、、、まあ、たまにはいいじゃない。」
「そう？　じゃあよろしく。」

このまま座ってたら、泣いちゃいそうだから。

母さん、私を生んでくれてありがとう。
私を育ててくれてありがとう。

　私の中身は、もう殆ど普通の高校生になっていしまっている
（実年齢１９歳だけど）。
以前のように、特定の親しい友人は作らないとか、
　二年以上同じ学校に通わないだとか、記念写真は避けるだとか
（プリクラは記念写真じゃないよね）、そういうこともあまり考えなくなった。

　コイちゃんやノンチと寄り道したり、下級生にお茶の手ほどきをしたり、
”ケーキ屋さんとかでアルバイトなんかもしてみたいなぁー”、っ
て言ったら”やめとけ”って言われたけど。

「どうして（怒）。」
「客がかわいそうだろう。」
「意味分かんない。」

「じゃ、僕客ね。店員さんやって。」
コント？

「自動ドア開いた。カップルの客入ってくる。はい！」
「いらっしゃいませ。」
なんでこんなこと？

「えーっと、このコンベルサシオンってどういうケーキですか。」
女声？　おやま？

「パイの中に、クレームダマンドが入っています。
　クレームダマンドはアーモンドのクリームのことなんですけど、
　すこし香りのついた紅茶にすごくあいますよ。」
ふふん。

「じゃあ、このオペラっていうのは。」
「チョコレートとビスキュイ・ジョコンドとバタークリームが層になっていて、
　噛むほどにいろんな味が混じり合って、奥深い味わいになります。
　グランマニエの香りがするちょっと大人のケーキです。」

どう、完璧！

「タルト・オ・フリュイも美味しそう。」
「当店のは、ラズベリーやフランボワーズ、定番のイチゴ、
　大粒のマスカット・アレキサンドリアを合わせた、
　酸味と甘味がコラボレーションする、見た目にも・・・。」
「ああ、もう選べない。全部買って！ってことになるだろうが。
　そうなったら、男がかわいそうだろう。」
論理性全くなし！

というか、
「いつもそんなことやってるの、瑞江ちゃんと。」
「えっ。いや、別に、そういうわけじゃないけど・・・。」
墓穴、ほったわね。

だから、こういう報告とか聞くのも、最近はすごく億劫なのです。

”ラフィエットの件、だいたい状況がわかりました。”
ほんとにあの男。アメリカでアームチェアに座って、
ポテトでも食べて大人しくしてればいいものを。

”どうかなさいましたか。”
「あ、いえ。続けて下さい。」

”どうやら、選挙がらみの点数稼ぎのようですね。”
「選挙？」

”ええ、彼が所属している、東洋美術クラブの理事長選が
　近々有るそうなんですよ。
　彼はいま、そのクラブの１０人居る理事のうちの一人なんですが、
　次は自分だと思ってるようですね。”

「それって、何か重要な仕事なの。」
”いや、ただの名誉職です。ランチミーティングでいい席に座れたり、
　会員を表彰するときにメダルを渡したり。
　他の何とかクラブの理事長と握手出来たり。”

くだらない。

「蓮さんをアメリカに呼び寄せることが、その点数稼ぎになるのかしら。」
”これだけではないんでしょうが、こういうクラブの理事なんて、
　無給のボランティアのようなものですからね。
　名誉職とはいえ、クラブの顔になるわけですから。
　外に出して恥ずかしくないような、それなりの人物を選ぶ必要はあるでしょう。
　日頃どれだけ社会貢献しているか、というのは基準の一つになり得るでしょうし、
　日本からの留学生を無償で世話している、なんてことを思いついたとしても、
　不可解では無いでしょう。我々の財団でもやっていますしね。”

「そうだったわね。じゃあ、入国の時に言ってたことって。」
”スピーチじゃないんですか、理事長選のときの。
　全くの嘘ではないんでしょうけど、上手に脚色していますね。
　気に入りませんか？”

「いいえ。世の中の全てが、善意で動いているわけではないのだから、
　乗るも乗らないも蓮さん次第。それに、このことが直接我々の同族に
　関わっているのではない限り、私が間に入ってどうこういうことでは
　無いと思います。」

”承知しました。又何かあればご報告いたします。”

「ありがとう、寺島さん。」

　私が気にしたのは、このことを景に言ったほうがいいのかどうか、
ということだ。
　中身は高校生、とは言ったけど、他人ごとには一切首を突っ込まない、
というのは昔のままの判断だ。

だけど、景は違う。

景は、聞きたいだろうなあ。こういうことも。

　ヒロが入学してきたので、ちゃんとした練習メニューを
組めって顧問に言われて。

　顧問に言われた、っていうのはなんとなく気に食わないんだけど。
まあ、それはもっぱら中学の時のいけてない顧問のせいで、
この学校の先生のせいじゃない。

　でも、確かにいつまでも中学の延長ってわけにも行かないんだろうなあ、
なんて思って、あれこれ考えて、一応本も読んで、
水曜日を軽めのメニューにしてみたせいで、今日は終わるのが早い。

　ちょっと走り足らない気がしないでもなくて、でも、
僕と同じだけヒロに走らせると、ヒロの疲労が大きすぎるんじゃないか、
っていうのも気になる。
　こういうのって、本当は専門的に勉強しないと行けないんだろうなあ。
　まあ、でも体育教師の大鳥先生はひと通り目を通して、
これでいい、って言ったし。

だから、練習的には、何の問題もないはずなんだけど。
な、ぜ、か、紀野っちには、またサボってんじゃねーか、
みたいな目で睨まれるし。

だから違うって。
科学的な練習メニューなんだって。

え、うそ臭い？
うそ臭いって、、、まあ、科学的っていうのは嘘だけど。

さてと、千冬誘って帰ろうかな。

軽めのメニューでも、多少の汗はかく。
　だから、茶道部員としては、本当はシャワーしたほうがいいんだろうけど、
この季節だと、その後歩いてるだけでも汗かいちゃうからもういいや。

今日は茶室に入るつもりもないし。

体育館下の更衣室を出て、ブラスバンドのパート練習の、
まとまり感のない響きを耳に中庭を横切って、もう一度校舎に入って、
茶道室っていうプレートを見落とすと、何の部屋だかわからないぐらいに、
何の変哲もない扉を入ると、脱いだ上履きがきちんと靴箱？、靴棚？
に揃えてあるんだけど、僕は顔出すだけだから、
一応ここに右手で揃えて置いておくことにして。

「失礼しまーす。」
”あ、中森先輩だ。”
ちゃんとお稽古してるか、１年ども。

「先輩、今日は走らないんですか？」
「もう走ってきたよ。つっても、今日は軽めのメニューだったんだけど。」
だあれだっけなあ、この子。
顔は覚えてんだけど、名前思い出せねー。

「じゃあ、今日はお稽古して行きましょう。」
「いや、今日はもう帰るつもりで、千冬を探しに来たんだけど、
　千冬ってどこ？」
「ピロティじゃないですか。文化祭の打ち合わせって。
　先輩バッグ下ろして、一杯だけ飲んで行きましょうよ。」

あ、こら、腕引っ張るな。
なんか、酔っぱらいに飲み屋に連れていかれてるような気がしてきた。
この上下関係のなさって、運動部じゃ考えられないな。

「わたし、点てますね。」

「出来んの？」
「半年やってきたんですよ。もう、そこそこです。」
それじゃあ行けるのか、行けないのか、分からんだろうが。

「私も一緒していいですか。」
「どうぞ。」
なんだかんだで、全員並んでるじゃない。

「２年は？」
「だから、文化祭の打合せですって。」
「聞いてねえぞ。」
「先輩、陸上が忙しいから多分来れないって。千冬さんが言ってましたよ。」
ふーん、、、そうなのか。

「先輩、お稽古してますー？」
この隣りのも名前分からんな。

「家でやってる。いや、やらされてる、っていう方が正しいけどね。」
「嫌いなんですか。」
「どっちかっていうと、コーヒーの方が好きなだけ。」
あー、って。どういう反応？　みなさん。

うーん、茶を点てるというより、抹茶をミキサーするって方が
近いかもしれないな。
音がなあ。

「どうぞ。」
「頂戴します。」
うーん。これは、これで。ずっ。

「どうですか？」
「いいの？」
「はい。」

「残念だけど、”だま”になってる。それと、無駄に腕振ってる。」
「そっかー。」

「でも、見苦しいとか、そんなじゃないよ。僕なんかよりよっぽど上手い。」
「そうなんですか？」
「うん。だって、一回もやったことないもの。」
えー、、、って驚くほどのことじゃないでしょ。

「千冬師匠が厳しくてね、あなたにはまだ早い、って。」

「千冬さん、私達にはダメだししないんですよ。よく出来ました、
　とか上手とか、だからほんとにちゃんと出来てるのか、よく分からなくて。」
「出来てないんですけどね。」
「そうそう。」

「で、僕なの？」
「そういうわけでもないんですけど、たまたま。」
「たまたまかあ。」

「先輩、もっと来ましょうよー、部活。」
「で、けなすの。」
「先輩に言われても、ムカつかないし。」
「なんかね。癒し系だし。」
ゆるキャラなのか、僕って。

「馬鹿な事言ってないで、次、点ててあげたら。」
「あ、はーい。」
「次、わたしやりたい。」
とととと、って畳の歩き方じゃないだろそれ。

ひょっとして、それも僕が飲むの？
まあ、もう一杯ぐらいならいいか。　これもそれなりに、、、ずっ。

「泡が足りない。」
「難しいんですよねー。」
「でも、一生懸命やってくれてたのは良かった。」
「心だけは込めましたからあ。」
調子いいやつ。

”結構なお点前でした。”

うーん。みんな、それなりに格好付いてるじゃない。感心感心。

でも、これ以上飲んだら血液が緑色になる。
「じゃあ、僕はこれで。」
「えー、もう帰っちゃうんですかぁ。」
「此処に来る前に、５キロも走ったんだよ。」
「ひえー、５キロ。」
「じゃあ、今度は陸上サボってきてくださいね。」
そんなことしたら、紀野っちにまた睨まれるよ。

で、彼女だれだっけ？

ピロティっていってたっけ。まだやってんのかなあ。
日がオレンジっぽくなってきた気がする。

あ、いた。ゲンパク、真面目に来てるんだ。
それと、遠山さんと松代先輩か。なんか、楽しそうに笑ってる。
普通の高校生みたいだ。変な言い方だけど。

うーん。

　僕が行かないほうがいいかもな。
折角、僕以外の人たちと盛り上がってるのに、帰ろうなんて言えないし。
いま、いい雰囲気みたいだし、僕が割り込んでそれ壊しちゃうのもな。
っていうか、ちょっと入りづらい。

なんつーか、小学校の頃のこと、ちょっと思い出した。
ああいう輪の中に、入って行けなかったんだよなあ。
自分が何か、違う人間のような気がして。

ま、いいや、今日は先に帰ろう。

ケイタイを出しては見たものの。
・・・瑞江は、今頃合唱で歌ってるんだろうな。
秋は文化祭とか、なんだかんだで忙しいだろうから。
練習の邪魔っていうか、出てこれないのわかっててメール送るほど、
我儘なやつではありません、と。
バッグに逆戻りだ。

ヒロはギンとペコと一緒だったな。またコンビニかな。
真っ直ぐ帰れっつーの。

中途半端な時間に帰ると、この坂道も人が少ないな。
帰宅部はとっくにはけてるし、部活の練習はこれからの時間が一番キツイ。ハハッ。

ここって、こんな静かだったっけ。

日が沈むにはまだ早い。足音だけが耳につく。
雲の端っこが、ちょっとオレンジになって。
空の色がどんどん水色になる。
ターナーの空の色だ。

まだまだ暑いんだけど、でも、蝉の声がしなくなった。
かと思えば、モンシロチョウが飛んでいるのを見かけるときもある。
　モンシロチョウって春のものだと思ってたけど、
多分にあれは童謡で植えつけられたイメージのせいで、
秋口でも飛んでるんだ。

　そういう意味では、自然てかなり大雑把。だけど、季節と共に
着実に変わっていく。
この自動販売機は人工のものだから、まだまだ全部青色の
”COLD”表示だけだけどね。

自販機多すぎるよなあ。この駐車場際のに１台。
１０ｍも行かない公園に１台。もとタバコ屋の前に３台。
で、たまーに１本１００円の販売機があったりする。
２０円安いってことより、全国統一値段じゃないってことに驚いた。

山の上の自動販売機が高いっていうのは、理解できなくもない。
持って上がるの大変だもの。
　いつだっけ、中学の時かな、遠足で登山があってカンナがブーブー
いってたけど、山の上の小屋みたいな所に自販機置いてあって、
なんと２００円。
もちろん買っちゃいけないんで、実害はなかったんだけど、単純に驚いた。

でも、街中でなんで１００円の自販機があるわけ？　モメたりしないのかな。

あんまり気にしてなかったけど、サラリーマンてこんな時間に
帰ってくるんだ。この近くで仕事してるのかな。
うちの父さんなんか、日のあるうちに帰ってきたことあったっけ？
みんながみんな、そうじゃないんだろうけど。

こんな時間に帰ってきて、どうするんだろうな。
晩御飯とかまだ出来てないだろうし。お風呂？は尚更違うか。

”ただいまあ”
”おかえりなさい。”
”お父さんお帰りなさい。”
そっか。子供と遊ぶんだきっと。
そういうの、やったことない。覚えてない。

おーっと、アーケードを自転車で走らないでくださーい、
って時々言ってないっけ、この微妙な音楽の合間に。
しかも、大抵おばちゃんか、爺ちゃんなんだよな、そういう人って。
ん、３００円ショップ？　あったっけ、こんなの。
新しく出来たのかな。だとしたら、この前は何屋だったんだろう。
思い出せないなー。ここしょっちゅう通ってるのに。

テーラー寺西。豊崎理髪店。木下時計店。平野無線。
このあたり、明らかに時間の流れが止まってるよ。
商品パッケージ、日焼けして色無くなってるもの。
そのうち、きっとドラッグストアとかになるのかな。
そういう店って、つくりがチャラいから、あまり好きじゃないん
だけどね。

うー、、、、なんかなあ。
なんなんだかなあ。
いつから、こ、

「景！」
へ！？
蓮さん。

「今日、バイト？」
「今日はお客。ちょっと気分転換。」
「ラ・メールに？」
「そうだよ、ラ・メールだよ。悪かったな、そこしか知らなくて。
　景は来ないの？　っていうか、一人？金魚の糞は？」
金魚の糞、、、。絶て一言えねー。

「部活でタイミンあわなくて。だから帰りまーす。」
「ふーん。」

なんでこの道の真中で喋ってんでしょうね、僕達。
「じゃあな、、、また来るんだよね。」
「うん。主に週末。」
高校生の小遣いで、週に何度もいけないって、ああいう店。

蓮さん、ちょっと雰囲気変わったな。
付き合う人たちが変わったからかな。自分で稼げるようになったからとか。
絵描いて、それを売って、それで食べていくってどんな感覚なんだろうな。
電気炊飯器売るとか、焼きそば売るとかとはちょっと違うんだろうなあ。
それはそれで、いろいろ、あるんだろうなあ。

僕は、今んとこ、なんにもないけどなあ。
駅までって、こんなに長かったっけ。
こっから家まで、あとどんだけあるんだよ。
まじかよ。

あ、蒲生行きの電車が来た。いま走れば間に合うけど、普通電車かぁ。
微妙だなあ。走ってまでして乗る気になんねーなあ。

うわっ！　急に肩つかむな。誰だ。
「景、どうしたの。」

蓮さんこそ、
「なんで？」
「捨てられた犬みたいな顔で歩いてて、”なんで？”は無いだろう。」

僕、いまそんな顔してるんだ。

四度の穣りが過ぎた。

「ちょうちょ。」
「そうやな。」

多少はあるが雨はふり、日は照りつけ、稲を養った。
　稲の足元では、ドジョウが泥の中をあさり、そのドジョウを
白鷺がついばんだ。

その上空を、鳶が輪を描いて、甲高く笛を吹く。
北から鴨が飛来すると、まもなく山が白い冠を頂く季節となる。

　野原は砂色となり、朝ともなれば霜が降りて、山あいから顔を出した
ばかりの光に、白金の輝きを見せる。
霜柱が表土を押し上げ、時にはその上から霰が叩きつける。
　寒さは厳しいが、大根や蕪は青々とした葉を茂らせ、
皮をむかれた柿が、腐ること無く甘みを増していく。

　梅が開き、青葉を茂らせ、実がまるまると太るころに、また次の稲が
穂を茂らせる。

そんなふうに季節はめぐり、那扶由は３つになった。

「とんぼ。」
「どこや。」
「あっち。」
「あっちか。」
「あっち。」

あの年以来、加羅の里の周辺では、騒動というようなものは起こっていない。
そのことは、人の口にもあまり上らなくなった。

　しかし、都から遠い東国や西国では、荘園や租税をめぐる争いが
頻発するようになっていた。
その年の作柄がどうであろうと、それで税が無くなることはない。

いやむしろ、都の貴族は地方がどうであるかを知らない。

かつて奈良に都のあった世においては。あるいは彼らが、豪族と
呼ばれていた頃には、地方の所領とそこに暮らす一族との結びつきはあった。
地方の経済力が、中央での力でもあった。

　だが、平安京に遷都し、藤原一門が官職を独占するころになると、
貴族達は、平安京だけが宇宙であると思い始めた。
　中国の都を真似て、坊城に区画された都市。そびえ立つ朱塗りの門。
色鮮やかに塗られた寺院。東西にそびえ立つ塔。
　そんな都市は、ここ以外に南都を除いては、この国のどこにも
存在しなかった。

親から位階を受け継ぎ、それを子に受け渡す。
権力を争い、政敵を失脚させ、女を篭絡する。
貴族以外の人を”犬”とよび、困ったことは仏頼み。
それが、平安という幻に住む貴族だ。

　しかし、平安とは名ばかりで、地方の民はすでに、反逆するか死ぬか、
の瀬戸際に追い詰められつつあった。

　そして、将門の乱。純友の乱。その他、名もつけられない騒乱は、
この国の民の形を次第に変えていった。

「そろそろ帰ろか。」
「いや。もっとおうまさんするの。」

　この頃は、というか、言葉を覚えて口が達者になってきたら、
とんと俺の言うことを聞かなくなった。

それを扶由姫にいうと、
「多津那に似たのだろう。」と言う。
それを言う時の扶由姫は、なにか得意気な様子を目元に漂わせている。

　那扶由を鞍の前に座らせて、ゆらゆらと野辺を往く事自体は
嫌いではない。
　板の上に上がり、扶由姫や清らの前であやすことの
居心地の悪さに比べれば、こちらの方が俺の趣に合う。

　添うてみて、子を設けたが、扶由姫との関係はあまり変わらなかった。
遠いようで近く、近いようで遠い。
　何か変わるかと期待していたわけではないが、男と女の中は、
所詮そんなものだということを知らなかったということを、
ようやく知った、ということに、なんとのうがっかりした。

まあ、「多津那もまだまだやな。」と、イチヒコにからかわれ、
「ようやっとわかったんか。」と、年下のサカヒにも言われ、
面目丸つぶれなのだが、加茂の長者に「多津那も丸うなったな。」
と、したり顔で言われたことに比べれば、それはなんということはない。

　あのオヤジ、いつか思い知らせてくれよう、と思ったが、
あの、よく出来た奥方に免じて許してやることにする。

　女と男の間は、近いようで遠い。
「どんなに好きおうたとしても、たまたま同じ時に、お互いの気持が
同じ方向を向いているというだけで、実は、己の気持ちに忠実なだけ。
相手の心を思うてのことでは、ございませぬゆえ。」
というたのは、なんと清らであった。

では、遠いようで近く思うのは？
「身は遠く離れていても、思う気持ちさえあれば、間近に居るように
感ずることもあり。何もかも違うと思いながら、思いがけず同じものに
心動かされることに気づいたり。
　木の根が弱れば、葉が弱り。互いに交わることがなくとも、
目に見えずつながっている。そのようなことかと、思われますなぁ。」

清らのことも、よくわかっていなかったことを思い知る。
帝の姫の、養育係に選ばれる女御なのだ。
これぐらいの機微が語れて当然なのであろう。

「おりる。」

”姫というものは、館の外に出たり、ましてや土の上で遊ぶなど、
めったにはしないものです。”

と、清らには言われたが、それでは身体が弱ってしまう。
都の姫の中には、二十歳やそこらで病気にかかり、逝ってしまう者もおおいとか。

しかしこの子は、加羅の血を受けつがねばならん。
一人の姫として生きるというより、加羅の血を継ぐものとして、
まずは生きねばならない。
”しかし、”と清らは言わなかった。

　あの襲撃以来、こうではないか、ということはあっても、
俺に対して重ねて無理押しすることが無くなった。

「おりるの。」
「ああ、分かった分かった。　イチヒコっ。」

よい、と。
重うなったな。
「転けんように、見とってくれ。」
「分かってる。」

さすがに、怪我でもされたら、あとが怖い。清らより、扶由姫が怖い。
ああ、走るな、と言うに。

　そのせいで。まあ、清らが無理押ししなくなったせいで、
俺も清らのいうことを、注意深く聞くようになった。
那扶由は、加羅の跡取りだが、帝の系統につながる姫でもある。
そちらのことは、俺ではわからんから。

「おはな、きれい。」
どおれ。降りるてみるか。

「どれや。」
指の先にあるのは。

「萩、やな。」
「はぎ。」
「そうや。」

ひとつかみ、持って帰るか。また手桶にでもさして、飾ってやろう。
芒と一緒に入れてやってもいい。
「ええのか。そんなもので切って。」
ん、小刀のことか。

「ええんや。もう、出来れば刀で人は切りとうない。
　こういうものを切るのに使ったほうがええ。」
ふんっ！
これはこれで、難しい。上手く斜めに刃をいれんと、皮を傷つけるだけで切れよらん。

「ほら、萩や。はは様に見せに帰ろう。」
「はい。」
落とさんように持てるか、そうか。大丈夫か。

「多津那。ホンマに変わったな。」
何を言うとる。

「オレは、それでええと思うぞ。」
ぬかしとけ。

館に上がる前に、足を洗うてやらなあかんな。
「イチヒコ。先に館に戻って、すすぎの用意をさせといてくれるか。」
「わかった。」

　イチヒコが、ああして細いあぜ道を風のように
駆けていくところを見ると、ちょっと羨ましゅうなる。
　オレはもう余程のことがない限り、ああして野を走ることはない。
急ぎの時は、もっぱら馬や。

　誰に言われた訳でもないが、扶由姫が身籠って、俺も親になるのかと

思った時、もう、怒りに任せて刀を振り回しているのでは、あかんのだと思った。

それと同じように、子供のままではいかんのだと。
順番が逆なのは、俺らしいがな。

もっと、里のことや一族のことを考えていかんと。

「楽しかったか。」
「うん。」

里のことや、一族のこと、、、那扶由のこと。

多津那が懸念していることは、こういうことだ。

扶由姫は、多津那と事実婚状態にある。
それは、もう神への言継ぎ、斎王としての役割を終えたということだ。
　もちろん、扶由姫は都から下る以前に斎王を退いていたのだが、
この地に在し、祈祷を行うこと霊験あらたかなりということで、
在地の諸豪族の崇敬を集めた。

いわば、この地の”斎王”のようなものであった。
　だが、斎王は未婚が基本である。ために、扶由姫の役割は
終ったはずである。

　さて、この国の信仰は、とても緩やかだ。この国の神は、
慈しみを与えたり、怒ったりはするが、人を裁くことはない。
神のかたちさえ、人の都合で変わってしまう。
都を震わせる荒神が、学問の神となって梅の花を咲かせたりもする。

神は主ではなく、人は従でもない。神は統治しないし、支配もしない。
言葉を借りて言えば、神とは法則のようなものである。

神のご機嫌が悪ければ日照りが続くし、神を怒らせると雷が落ち、雹が降る。
だから、神様に供え物をし、神をもてなす舞を踊る。

扶由姫は、多津那と関係を結び子を設けたが、結局のところ請われて、
神へのとりなしを続けることとなった。
曰く、子は豊穣の証だ、というのである。

扶由姫は、己が何者であるかをよく認知していたし、
それが子を孕み産んだとして、己の内部の何ものも、
変わりないことをよく見ていた。

だから、この辺りの長者共が、こぞって初子の祝いに罷り越し、
絹やら錦を献上する傍らで、
「この後につきましても、よろしうにお頼み申します。」と言うのに、
「あいわかった。次の夏、次の秋。そしてまた次の夏にも、

　お前たちのために祈願せむ、とぞ思う。」
と答えた。

扶由姫に寄進された領地は、そのまま手付かずで置かれた。
　寄進されたというのは、領地そのものというよりは、
そこからの収入の権利を寄進されたという方が正しい。
土地と作人たちは、もとの領主のものであった。

扶由姫には荘園経営なぞ出来るはずもないし、寄せれば結構な広さに
なるだろうが、彼方此方から寄進された土地は、
それぞれは小規模に分散し、まとまりはない。
だから、領地というものとは基本的な姿が違う。

とはいえ、身入りはよかった。
もちろん扶由姫は、そんな事は知らない。清らは知っていた。
故に、多津那が鷺の館を訪れると、何がしかが増えたり
変わったりしている気がした。

そこまではよい。

多津那の悩み事は、加羅が少し大きくなりすぎた、ということだ。

多津那の代になってから、加羅の里自体が何がしか、大きくなった
ということはない。
多津那らが引いた新しい水路で、田畑を広げようという事にはなったが、
広げすぎても耕し手が居なくては何もならない。

それが目に見える形で実現するのは、もう少し先になってくるだろう。

扶由姫が下ってから五年。
この地に、古来から受け継がれた、地付きの神に対する祭礼が、
少し型を変え、扶由姫を中心とした儀に変容した。

田植えの祭礼にせよ、秋の祭りにせよ、扶由姫の御成りがなければ始まらない。
それに加えて、扶由姫が持ち込んだ、葵の時期の祭りや初穂の献上など、祭事が増えた。

そのことごとが、扶由姫を中心として動いている。
祭事は、何事も扶由姫様に。そういう暗黙の了解が出来てしまった。

そういえば、前にもこんなことがあったな。
姫に花を編んでやったときだ。己の様が見えぬので、
疾く帰館せよと急かされて帰ったことがあった。
３つの幼女と比較した、などと知れれば怒るかもしれないが、
花につられて帰るところなど、親子よなあ。

田畑の間を抜け、夏草と秋草が競う野を進み、すれ違う里の者が道をあけ、
頬被りをとって愛想をする。
那扶由に、、、オレにではのうて。

「あれ。」
おう。
「バッタが北斗にびっくりして、飛んで行きよったな。」
「ばった？」
「バッタ。」
道はだんだん傾斜していく。

森と野の間には、境目がある。
同じ木、同じ葉、同じように花をつけるものなのに、森は野と交わらない。
そして森は竹林と違い、大きく広がっては行かない。
もしかすると、少しずつ広がっているのかもしれないが、人の目にはわからない。

人はその木を切り倒し、野と同じように道をつける。
木の間を通っていると、野とはまた違う匂いが満ちてくる。

鳥の声が増え、人の声が消える。
時折、霧が立ち込めたり。朝もやが輝いたり。
なにより面白きは、朝方、木の間を斜めに挿し込んでくる光の美しさよ。
　この館が出来るまでは、そして通うようになるまでは、
そういうことを知らんかった。

鷺の館の門前まで来ると、男が馬の手綱を抑えた。
那扶由を右の腕に抱えたまま、多津那は馬から降りた。

階の前に、洗い桶が用意してあった。
那扶由を座らせると、下女の手が伸び、小さな足を柔らかく水でもみ、
布で水気を拭き取った。

用意がいいな。簀子に手桶が置いてある。
イチヒコが、そんな指図までしていたのなら、少し笑えるな。
いや、もしそうだとしたら、この里に、そういう雅た風まで
広まっているということだろうか。
であれば、面白い。

「那扶由。萩をこれに。」
「はい。」
あとで水切りをしてやろう。今はこのままでよい。

「母様に見ていただこう。持てるか？」
いやいや、か。だろうな。

さて、どちらに、
「いるか。」

「こちらに。」
南の廂か。
これ、走ってはいかん。

「走ってはいけませんよ、那扶由。」
子供に走るな、というのが無理だとは思うがな。
「那扶由が見つけたのだ。」
「まあ。萩。」

そうやって、懐に入り込むと瓜二つ。
おっと、瓜の話しをすると、なぜか機嫌が悪くなるのだったな。

「明日にも、庭に移しておこう。」
「梅、つつじ、紫陽花。あと、何と何を植えたのだったか。」
「椿、花菖蒲、藤、木瓜。そんなところか。」
「そんなもので、収まるものか。」
まあ、よいではないか。

「楽しくないか。季節季節に花が咲いて。」
「植えるなとは言ってない。」
では、なんだ。

「勝手がすぎる。」
そうか。

「萩を植えてもよろしいか。」
「苦しゅうない。」
那扶由は真似るなよ。

花一つでこの調子だ。
であれば、あのことはちゃんと話して置かなければなるまいな。
何かのきっかけでもあれば、と思うのだが。

「ばった、見たの。」
おいおい、いきなりだな。
「ばった、とはなんじゃ。」
「飛ぶの。」
「飛ぶのか。トンボのようなものか。」
そういえば、この屋敷も、夏の間はトンボの通り道になっていたな。
姫は、絶句しておった。

「ちがう。」
「違うのか。そうか。那扶由は、ばったが好きなのか？」
そんなに顔をしかめずとも良かろう。バッタも嫌われたものだな。

「ばった、こわい。」
バッタにしてみれば、那扶由の方がもっと怖かろう。

「秋の虫の類か。」
うむ。

「野の草の、葉の裏などに止まっているが、人が近づくと跳ねて逃げる。
時には稲につき、葉を食むものもいるが、そやつらを食する国もある。
どちらもどちらだな。」
「那扶由。今のは、聞かなかったことにするのじゃ。」

それは無理だ。
那扶由の記憶には、もうしっかりと書き加えられている。
数えの４歳とはいえ、俺の子だからな。
と、思うのだが、正直な所はまだわからん。

「多津那、今宵は。」
「ん。泊まっていく。 租を庫に納め終わって、一段落ついたからな。」

　都に運ぶまでのひと仕事は残っているが、この近江から都までなら、
片道２日ほどの荷運びや。都での遊興を、楽しみにしておるのもいる。
そいつらには、ええ口実になるやろ。

にしても、
「国衙の役人には呆れ果てた。刈り取りの直前に、馬で一巡りしただけで、
　後は国府に収まったまま。どれだけの俵が収められたか、
　下っ端任せで自分では確かめもせん。」
まあ、俺も顔なぞ見たくもないがな。

「役人には役人の、己の分というのがあるのだろう。
　それならそれで良いではないか。」
役人どもに聞かせてやりたい。
ありがたい、帝の姫のお言葉ぞ。涙流して喜ぶに違いない。

「俺にとっても、その方がありがたいのやが、人としてはどうかと思うぞ。」
「多津那が人を語るな。」
そんなに可笑しいか。

「ここ１０年以上、租の高が改まったことはない。誰も調べにこんからな。
　その間、加羅も加茂も耕す田を広げ続けた。そこからの上がりは、
　全部我々のものや。ここだけやなくて、いまや国中がそうやろう。
　それだけならよいが、貴族や寺や国司が勝手がってに免租したりしよる。
　国司が変わったら変わったで、また一から関係を結び直さなあかん。面倒なことや。」

「どうして調べんのじゃ。それは大事な仕事であろうに。」

ん、酒か。これは、どこの酒やろう。
なんか、姫に注いでもらうのは、いまでもなんとのうこそばゆい。
どちらかと言えば、お仕えしてた時の記憶が残っているのやろうな。
俺よりも、姫の方が適応力があるのは、意外やった。

「今のは？」
「どこぞの娘とか言うておったが、忘れてしもうた。
　行儀見習とか、教養を、とか、清らが言うておったが、予は知らぬ。」
美味いな。

「清らどのは？」
「加茂へ行った。」

　それで姿が見えんのか。まあ、先ほどのような娘どもが増えて、
身の回りの世話や、お相手には困らぬようだ。
俺もそのほうが、いくぶん気が楽だ。

「昔、横柄な国司がおったらしい。」

横柄なだけならまだしも、都風をひけらかして里人を馬鹿にする。
おまけに欲深い。
だいたい下等な人間というのは、そういうものや。

１年目は里のものも我慢しておった。たかが３年のこと。
その間、辛抱したらええことやと。
　けれどもその国司、何を思うたか、里の娘を見初めて、それを差し出せと
言いよったらしい。
妻と子は都落ちは嫌じゃとて、ついて来なんだのやな。

これが間の悪いことに、その娘には約束した男がおった。
　国司は言うことを聞かねば、難癖をつけて都に奏上し、武士なんぞを
呼んで仕置をするぞと脅す。

板挟みになった娘は、ついに
「私が身を捧げれば、丸くおさまること。口惜しいが、
　里のためにと諦める。」
という始末。

　けれども若い娘にそこまで言わせて、里の者も黙って見送る
わけにはいかんと、腹をくくりよったんやな。

毎年、国司を呼んで酒食でもてなすということをしておった。
　国司へのお礼というか、何かにつけて手心をお願いすると言うか、
遊び女なんかも侍らせて、あまり外には漏れ聞こえては困るような
遊びをさせて、ちょっとした弱みも握っとく、というような宴席や。

　その年もそういう頃合いになったので、檳榔毛車をしたてて
国司と従者を迎えにやらせた。
　大きな館の大広間に、近郷近在の長者を呼び集めて、
それから二日間の大宴会や。
酒、肴、それに女。

おそらく、国司もこれほどの宴席は初めてやったようやな。
　舞を観、音曲を楽しみ、進められるままに飲み、出されるままに
箸をつけた。女と戯れ、嬌声に大笑いし、鼻の下をだらりと伸ばしておった。

　宴席も２日になると、国司がまず酔いつぶれ、それを見た従者は、
今度は己が主人とばかりに、ひと盛り上がりしたあと、それに続いた。

　もちろん、例年はそんなことまではせん。近郷近在の長者、
のふりをした地下人を相伴させるなんてこともせん。

酔いつぶれたところで宴席は終わりや。
　国司と従者は、つぶれたまま戸板に乗せられて、館の外へ運びだされた。
　それから三町ほど離れた、無住となった荒れ寺の本堂の板間にごろっと
転がされて、そのまま放っておかれた。

　酩酊しておったので、それからどれぐらいの間、寝ておったのかは
分からん。
　どうやら、ねずみに足や耳、鼻をかじられて、あまりの痛さに
目を覚ましたらしい。
慌てて寺は出たものの、一体何処に居るのかも見当がつかない。

　たまたま通りかかった地の者に道を聞こうにも、あまりの風体に
みな恐れをなして逃げていくばかり。

　それから、なんとか国衙まで逃げ帰って、一息入れたら、
腸わたが煮えくり返って来たのやろうな。

国衙の下人共に刀や槍を持たせて、馬で乗り込んできた。
この度のことは、どういう魂胆じゃ。
返答次第によっては只ではすまさぬ、とな。
顔は傷だらけや。えらい恐ろしい形相やったらしい。

すると、里人は怪訝な顔でいうたそうや。
”一体何のことでしょう。”
”この度の宴席で、酔うた我等を荒れ寺に放置したではないか。
　お陰でこのあり様じゃ。”
”宴席？　待てど暮らせどお見えにならずであった。
　如何なされたかと、みなで噂しておりましたが。”

　何をとぼけておると、そこらに居るものを手当たり次第に捕まえて、
刀で脅ししても、一様にとまどい、同じ事を言うばかり。

”しかし、檳榔毛車で迎えられ、あれほど多くの近郷の長者と
　酒を飲みあかしたのは確たること。我も、家来もみな覚えておる。”
”何をおっしゃいます。都ではあるまいし、檳榔毛車など仕立て用も
　ありません。また、それほどの長者様がお集まりなど、
　聞き及びがございません。
　もしや、狐狸の類にたぶらかされたのでは、ございませんか。”

「そこまで言われて、国司もようやく、事の次第に気づいたらしい。
　狐狸ではないが、誰かにたぶらかされたのだと。」
「それでどうなったのじゃ。犯人探しか？　気の毒な娘は。」

うーむ。
　姫が調子よく注いでくれるから、ちょっと酔いが回ってきたな。
気がついたら、表に放り出されていた、などとならぬように気を付けねば。

「いや、犯人探しとは、ならなかった。里にとっては鼻つまみものの、
　碌でもない男だったが、国司を任されるぐらいの者だからな。
　多少の分別や知恵は持っていたのよ。」

　たとえ国衙の者とはいえ、よそ者が刀や槍をぶら下げて、

里に乗り込んできたのだ。里の方も恐れ入りましたと、
おとなしく引き下がる訳にはいかない。
そんな事をしたら、のちのち舐められるからな。

　なので、こちらの方も、物騒な構えをした男たちが集まりだした。
しばらくは、様子見の雰囲気だったのだが、時間が経てばたつほど、
人数に差が出てくる。
多勢に無勢というやつだな。

　それに、事の経緯は皆同じではないのだろうが、其方此方で
国府と在郷の者との争いが火種となって、国衙に火を付けられたり、
襲われるようなことが起きていた。
碌でもない男は、この国司だけではなかったのだろう、きっと。

　国司としては、あまり面目は立たないが、ひとまず引き上げることに
したのや。
　おのが命と面目と、どちらを立てると聞かれれば、やはり命と応えるだろう、
この手の男は。

都の中流貴族なんぞは、自前の領地があるわけでなし。
官職は藤原に独占されて、昇進ののぞみもない。
都におれば、付き合いやなんぞで出費が嵩むばかり。

けれども、国司に任命されれば、地方と都の間に入って蓄財が出来る。
3年も勤めれば、一財産だ。
　国を治めるつもりなぞ毛頭有りはしない。大過なく努めて、
せっせと蓄財して、都に帰る日を数えるだけの毎日に、
何かの気晴らしがあれば上等だ。

「それで、どうなった。」
「病気を理由に、引きこもった。」
「なんじゃ、情けない男よのう。」

　那扶由は、とうに寝付いて、夜具の中で微かな寝息を立てている。
寝返りもせず、あまりに静かだと心配になるが、胸の上下をみて安心する。
などというと、俺も情けないと言われるだろうか。

「情けない。まあ、そうかも知れんが、殺されるよりは、
　そうとでも思われた方がましやろう。」
「どういうことじゃ。」

「つまりは、いい気になっていると寝首を掻くぞ、という脅しが
　分かったのだな。お前たちなんぞを手玉に取る事など造作も無いこと。
　狐狸に化かされているうちに、行いを慎むがよい、という脅しだと。」

なんだ。考え事か。何かを思い出しているのか。
「狐狸に化かされているうちに、か。
　誰がそれを仕組んだのか、なんとのう分かった。」

勘の良いお方だ。
あるいは、俺の知らない何かがあったのかも知れん。

　俺のように、刀を振り回したりはしないが、伯父貴のやることも
相当なものよ。下手をしたら、国衙の連中と戦になったかもしれん。
俺がもっとガキだった頃のことやから、これ以上詳しいことは知らない。

　面白い話だから、俺は詳しく聞きたがったが、叔父貴は、
この事は話したがらない。
生半可な気持ちでやったわけでは、ないんやろうな。

廊下を渡ってくる、衣擦れの音が近づいてくる。
帰ってきたのか。

”清らにございます。只今戻りてございます。”
さすがに、いきなりは入って来ぬか。

「うむ。遠出にて、疲れたであろう。下がって休むがよいぞ。」
加羅に来て、暫くは片時も離れることは無かったに。
まるで、卵を温める母鳥のようであった。
思えば、清らも戦っておったのだろう。

都を落ち、見知らぬ土地で、頼るべき氏を持たず。
　あてにした男は知らぬ顔。挙句には、歌の一つも読めぬ田舎の粗忽者、
とは俺のことだが、を相手によこす始末。

　風と木の音に怯え、月の影に怯む夜もあったろう。そういうことに、
何も気づけなかったな俺は。
そして、姫も女となり、母となった。

”多津那どのには、そちらに居られましょうや。”
「おう。いるぞ。」
なんだ、やぶからぼうに。

”いささか、ご相談したき議がございます。”

相談？　俺にか。

「わかった。入るが良い。」

乳母という役柄故か、清らは、努めて柔和な顔をしているように思える。
あまり、厳しく、貧しい顔などは見た覚えがない。
が、今宵の顔は、いささか真面目が過ぎるような気がした。

「おくつろぎのところ、申し訳、ございません。」
「加茂で、なんぞあったのか。」

　姫も気になると見える。常には毅然としていて、あまり、
心配気な顔を見せる方ではないのだが。
清らの思案が移ったか。

「いえ。姫さまが、ご憂慮されるようなことではございません。
　良し悪しを言えば、善きことかと存じます。」
「では、何故、そのような顔をしておる。」

　なにから話せばよいのか、という顔だな。良し悪しの、善しのことならば
躊躇うことではあるまいに、良いことではあるのだが、言い出しにくいことか。

俺に向かっては。

「今日は、加茂に行かれたと聞いた。加茂でどのようなことをなさっておる。」
清らは、伏目がちであった面を、つと上げた。が、まだ、まっすぐと、
こちらは見なかった。

「加茂の大殿の奥方に、娘と、手習い、歌を合わせたり、色の襲などを
試しておりました。」
「ほう。清らどのの目から見て、加茂の姫はどうであろう。」
「なかなかに、筋が良いと思います。」

　弟の縁組を決めてから、暫く間が開いてしまったが、そろそろ正式に
婿取りをさせようか。加茂の姫も、いつまでも清らが相手では、つまらなかろう。

「そろそろ帰らんと思いし頃に、加茂の大殿からお召がありました。
　ことさらの心当たりなど無く、何事かと訝りつつ、
　渡殿をめぐりて母屋に至り、お目通りいたしました。」

まことに、この館の広さといえば、都の一保に勝るかもしれぬ。
池、庭、築山。
簀子に居ながらにして、四季の移ろいを眺めることが出来る。

　紅葉、楓の季節にはまだ早いが、池の上に伸びたあの枝が色づく頃は、
さぞやおかしき見ものであろう。
いまは遥か昔であるが、この辺りに、いっとき宮が置かれたこともあると聞く。
地方豪族の財力というのは、侮りがたいものじゃな。

　この家の奥も言うておるが、都にいて、名ばかりの公家ぐらしを
しているよりは、余程それらしき暮らしが出来る。
和歌や管弦などは、そういった暮らしの、さらに上の方にある清らかな
上澄みのようなものだ。
それを盃にすくいて、酔いしれる事のできる者の数は、たかが知れている。

「清らよ。いつもいつも大義におもうておるぞ。
　奥も姫も、そなたの来る日を、心待ちにしておるよし。
　田舎者よ、不調法者よと気に触ることもあるやもしれんが、
　姫のこと、よろしくたのみたい。」

脇息に身体をもたせた姿勢のまま、佐理は言った。
枯色の狩衣姿は、奥の趣味であろうか。

「それは、まことに、恐れ多いことにございます。
　山吹殿は覚えもよろしく、ましてや、不調法などということは
　ございませぬ。此処が都であれば、宮中に出仕なども出来たで
　あろうと口惜しく思います。」

「なかなか、嬉しいことを云うてくれる。清らどののような、
　宮仕えをなされた方に見込んでいただき、親としても嬉しい。
　が、まあ、そんなことを聞くために、わざわざ呼び立てたのではない。」
そこまで言ってから、佐理は少し居住まいを正した。

　そう何度も会ったわけではない。むしろ、このように二人で対座する
のは初めてだ。

公家顔、とはいえねども、それなりに大殿の風格はあると思った。

「鷺の館も人が増え、手狭になってきたのではあるまいか？」

「は？」

「其処此処の長者からの寄進も増え、扶由姫様の威徳を慕うものも多く。
　さりとてあのような林間の館では、家屋敷の拡張もままならず。」

　そうだろうか。むしろあの深淵とした雰囲気が、姫様の神秘性を
増しているのではないか。
　あれを平地で顕現さするとなると、紫宸殿とはいわぬまでも、
大いなる館を建てねばなるまい。

いや、そんなことは、この清らでのうても分かっておるはず。

「どうであろう。この加茂の里近くに、大いなる館を建てようほどに、
そちらにお移りになられては如何と思うのじゃが。」

・・・なんと。

それは、加羅と袂を分かち、加茂の庇護に入れということか。
　何を思うての申し出か。加茂がそこまですることを、他の豪族が黙って
見過ごすだろうか。
しかし、ここは思案のしどころ。

「加茂の大殿の御申出で。この清らの一存では、なんともお答えの
　しようがございませぬ。
　一度館に戻りて、姫さまのご思量を得てからでなければ。
　お移りになられるのは、清らではのうて、姫さまでございますゆえ。」

佐理は、それ以上言葉を重ねはしなかった。

多津那は、どう出るであろう。
これまでの、加茂との縁に免じて、佐理の申し出に乗るだろうか。
それとも、加羅をないがしろにすることに、腹を立てるやも知れん。

近頃は、人柄が穏やかになってきたとは見えるが、芯は激しい男だ。
　夫となった今、多津那を抜きにして、姫さまを他所に移すなどとの
企てを知れば、いつぞやのように怒るかもしれぬ。

だからと言って、加羅の一族では加茂には対抗できぬ。
村の大きさが違いすぎる。

　それを考えると、姫さまには良き話と言えなくはない。
加羅という小さな木陰ではなく、加茂という大きな地盤に乗らないかと。
加茂の大殿は、口には出さねどそれを仄めかしているのだろう。
襲の下色のように。

「そういうことか。」
多津那には、特に気色ばんだ様子もなく、そのことは清らをほっとさせた。

そのつもりがなければ、即座に断ればよいことだ。
　けれども一度は受けて、姫の耳に入れると言うた、と言うことは、
全くその気がないわけでは無い、ととられても仕方ない。

事実、清らはそれも一つであるなと、思った。

「清らは、加羅では心配か。」
多津那は直截に問うた。もとより、回りくどいことは好まない。
あまり貴族とは馴染まない性格だ、と清らは思う。
ならば、、、

「はい。」と、答えたほうが良かろう。

「そうか。」
はっはっは、と多津那は笑った。
笑った後で、
「不思議なものよ。」と、付け加えた。

「何が、不思議じゃ。」と、問うたのは扶由姫であった。

「同じ時に、違う男が、たまたま同じような考えに至る。それが
不可思議に思うたのよ。」
ということであれば、
「多津那は、何を想うた。」

多津那は、改めて姫の方に向き直った。

よい機会を得た。
いや、潮時であったのかもしれぬ。
あの、加茂のオヤジまでが、そのようなことを考えていたとは
意外だったが、今となってはそれほど突飛とは思えんようになった。

「姫よ。都へ戻られよ。」

三年前であれば、顔を赤くして怒っていたかもしれぬな。
扇子か灯明の一つも飛んできたかもしれない。
でも、お互いに大人になった。
そうか、相分かった、そのようにいたそう、という顔ではないがな。

「姫がかつて暮らしていた、一条の屋敷。あれは、まだ残っている。
　ただ残っているだけではなく、手入れもされ、今直ぐ移っても、
　何の不自由もなく暮らせる。」

「それは驚いた。して、多津那の本心は。」
まさか、厄介払いではあるまいのう。

「加羅は、もともと小さな里であった。が、姫と俺が結ぶことにより、
　少し大きくなりすぎた。加羅の実力に見合わないほどに、
　仮の力が大きくなりすぎた、と俺は思っている。」

「仮の力とは、なんじゃ。」
「うむ。例えば、都の公家は大いなる力を持っている。
　けれども、それはその男や氏族のもつ力だけではのうて、下された官位に
　まつわる力であり、朝廷の力でもある。権力、威し、というてもいい。
　さて、加羅の実力は、たかが五、六百の里人の力。
　そこに、姫の祈りの力が加わった。
　俺はまだ、姫にそんな力があるとは想うてないが、たまたませよ
　姫が来てからというもの、日照り、乾き、となったためしがない。」

　こういう時、姫自身はどう思うているのやろう。こと、このことに関しては、
俺にすら何も言おうとはしない。
俺にすら、というのがとんだ思い上がりかも知れんが。

「姫を擁する加羅、という目で見た時。加羅は今までも、
　少し特別な里であったが、だからと言って、何かの力を持ってそれを
　里の外に向けたことはない。けれども、いまや、そういうことでは無くなった。
　俺が姫の力を傘に、何かを企てたとする。
　すると今までとは違い、周りの長者たちも無視するわけには行かなくなった。
　それを、鬱陶しく想う輩が居る。加茂のくそおやじの如くにな。」

「愚かしい。」
「そうだ。しかし、愚かなものだ、人というのは。何百年も、何千年も前から、
　愚かだ。同じ事の繰り返しだ。」
「多津那は、、、、多津那の一族はそういうことを記憶しておるのか。」
そうだ。そして那扶由もそうなる。

「ここのところ、そこそこの気候が続いたから何もなかったが、
　また干魃が来た時、今度は里が襲われるかもしれない。」

そんな備えはしていないし、するつもりも無いのだ。
　堀を造り、囲いをめぐらし、櫓を立て。そういうことをすると、無用の警戒心を

周囲に持たれる。
それが、逆効果になることもある。

「よく分かった。じゃが、予が、加茂の誘いを受けるのではいかんのか。」
「それは、那扶由を人質に入れるというのと同じだ。」

”あっ”と、清らが口を抑えた。

「清ら。多津那は大人になった。」
姫の言葉に、
「まことに、、、そうでございます。」と、認めざるを得ないと答えた。

「予が都に戻るとして、では、この近隣はどうなるのだ。今年も、
　これからも賀茂の大神に祈ってくれと言われておる。
　都へ戻るので、知らぬ、とは言えんぞ。もう約束した。」
「斎宮の奥にいた頃とは違うのだから、 飾った牛車にでも揺られて、
　折々に来て祈ってやればよいではないか。みなも、その方が有り難がろう。
　田植えの頃、稔の頃、、、。」

「まるで、出雲の神のようじゃな。それもよかろう。」
何かを懐かしむような顔になった。

「都を落ちて以来、ここに暮らし、ここで土に帰ろうと思い定め。
　故に、都のことは思い出さぬようにしていた。未練は、人を腐らせるゆえにな。」
そして、傍らに眠っている那扶由を見た。

「那扶由には、ここで大きくなる方が楽しいかも知れん。
　けれども、予は、都がやはり懐かしい。
　雅た風が懐かしい。」
はらはらと、二筋の雫が落ちた。

「俺はあまり気乗りはしないのだが、月の内半分は、都に滞在することにする。
　俺もそちらで暮らすのが良いのだろうが、加羅の頭領としての役目も果たさねばならん。」
「この薄情者。どうせ那扶由が目当てであろう。」
「はっはっは。それもあるが、那扶由がひとり子では可哀想だからな。」

清らはその言葉を潮に、音をひそめて退出していった。

真下魚名の既刊

「黄金の麦畑」

1.Largo http://p.booklog.jp/book/58662

2.Allegro molto http://p.booklog.jp/book/83865

3.Adajo （連載中）

「黄昏の王国」

イーリアス編 http://p.booklog.jp/book/49612

アリシア編 http://p.booklog.jp/book/51254

「ネガティブズ２」

「ネガティブズ」 http://p.booklog.jp/book/73051

ー　僕カノシリーズ　ー

「僕が彼女に殺された理由（わけ）」 http://p.booklog.jp/book/31906

「僕と彼女の選択の事由（わけ）」 http://p.booklog.jp/book/35498

「僕と彼女はそれしか答えを見つけられなかった」http://p.booklog.jp/book/36101

「僕と彼女はそれでも答えを探し続ける」 http://p.booklog.jp/book/36617

「僕と彼女と複雑な関係者たち」 http://p.booklog.jp/book/37238

「僕と彼女と単純な関係式」 http://p.booklog.jp/book/37731

「僕と彼女と校庭で」 http://p.booklog.jp/book/38409

「僕と彼女と校庭で　夏」 http://p.booklog.jp/book/38977

「僕と彼女のアリア」 http://p.booklog.jp/book/46524

「僕と彼女のインベンション」（次回）

ー　その他　ー

傘がない http://p.booklog.jp/book/69798

夕暮れの赤ちょうちん http://p.booklog.jp/book/42024

いもうと http://p.booklog.jp/book/40794

サマータイム・ブルーズ http://p.booklog.jp/book/34054

危険なドライビングマジック http://p.booklog.jp/book/33630

デフラグメント http://p.booklog.jp/book/33116

インフルエンス　あのころの僕たち http://p.booklog.jp/book/32752

花舞い、名残り雪 http://p.booklog.jp/book/32187

詞画集「ただ憧憬れだけを」 http://p.booklog.jp/book/34472

画集　「彼と彼女の表紙画集」 http://p.booklog.jp/book/39345